平成 29 年度
アクサ　ユネスコ協会　減災教育プログラム

平成 30 年　2 月 23 日　活動報告会

# 助成校　実践報告資料

22 校

# 目次

01.宮城県　亘理町立高屋小学校.....3
02.埼玉県　川口市立柳崎小学校.....6
03.長野県　諏訪市立城南小学校.....9
04.愛知県　名古屋市立内山小学校.....11
05.岡山県　岡山市立曽根小学校.....13
06.徳島県　上板町立高志小学校.....16
07.愛媛県　新居浜市立惣開小学校.....18
08.北海道　釧路市立山花小中学校.....22
09.岩手県　岩泉町立小本小学校　　岩泉町立小本中学校.....25
10.東京都　墨田区立両国中学校.....30
11.兵庫県　神戸市立須佐野中学校.....32
12.島根県　益田市立真砂中学校.....34
13.北海道　北海道標津高等学校.....37
14.宮城県　宮城県気仙沼高等学校.....43
15.栃木県　栃木県立栃木農業高等学校.....45
16.愛知県　愛知県立海翔高等学校.....48
17.京都府　京都市立紫野高等学校.....52
18.兵庫県　兵庫県立淡路高等学校.....58
19.広島県　広島県立瀬戸田高等学校.....62
20.熊本県　熊本県立東稜高等学校.....66
21.宮崎県　宮崎県立門川高等学校.....69
22.千葉県　千葉県立桜が丘特別支援学校.....73

| 学校名 | 01.宮城県　亘理町立高屋小学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 荒明　聖・寺島　富美 |

| 活動のテーマ | 未来への絆　－　東日本大震災の教訓をふまえた防災教育の推進　－ |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（道徳・特別活動，各教科における関連単元の学習） |
| 活動に参加した児童生徒数 | 全校児童４７人 |
| 活動に携わった教員数 | １５人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | １６０人　【保護者・地域住民・その他（地元の県立高校生，行政担当者）】 |
| 実践期間 | 平成２９年４月１０日　～　平成３０年３月２３日 |
| 想定した災害 | 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・本校は東日本大震災における被災校であり，町唯一，児童の津波犠牲者のあった小学校である。また，在籍児童の中には就学前，流された幼稚園バスから救助された子どもや避難途中で津波に巻き込まれた子どもがいることから，長期に渡っての心のケアを行う必要がある。しかし，地域の復旧・復興とともに風化しつつある震災の教訓をふまえ，あらためて児童の減災学習を深めることが必要であり，本年度の指導の重点課題として掲げている。以上のことから，机上の減災学習だけでなく訓練や防災キャンプを実施することで，実践を通して児童の災害対応能力を向上させていきたいと考える。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

① 系統的で継続的な防災学習（毎月 11 日・減災にかかわる学校行事の前後）

・毎月１１日の“月命日”に合わせて，みやぎ学校安全基本指針に基づいて，「みやぎ防災教育副読本」を活用した系統的で継続的な減災学習を設定する。

・着衣水泳や避難訓練等，これまでの学校行事を生かして減災意識を醸成する。　写真（１）

② 家庭や地域と連携した防災訓練（H29.6.11）

・全町で行う防災訓練をきっかけとして，学校を取り巻く地域の現状と課題をふまえた訓練と有事を想定した学校・家庭・地域の協働態勢を構築する。

③ 実践的な技能習得を目指した防災キャンプ（H29.7.1~7.2）　【③防災キャンプで避難所づくり】

・学校を会場とした防災キャンプを実施し，教室に宿泊することで避難所生活を体験する。災害時の非常食や学校地域の災害を想定した実践的なプログラム（ライフジャケット活用やロープ避難の体験等）によるスキルの習得を目指し，災害対応能力の向上を図る。

④ 未来へ向けた復旧・復興状況の調査・振り返り（各学年の校外活動）

・東日本大震災からの復旧・復興状況を振り返ることで，震災後，多くの人々の尽力によりふるさとが新たな町づくりを行っている現状を学び，未来への志をもたせる。

⑤ 防災学習に活用できる防災用品の充実

・防災頭巾等，避難訓練や減災学習で活用できる用品を充実させる。　写真（２）

⑥ 防災教育や東日本大震災からの教訓の伝承活動

（H29.6.11，7.19，8.30，9.28，12.1，12.20，H30.1.19，2.9，2.13 等）

・災害が想定されている地域への伝承機会を設け，東日本大震災以来，支援を受けてきた学校等へ感謝の念を込めて本校の減災教育の情報提供を行う。【⑥他校での伝承活動と減災学習】

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・９月の研修最終日に，校長職によるグループワークを行う中で，減災教育を推進する中での共通した課題や方向性を協議することができた。このことから，自校における教育活動の展開においては，人的環境の整備と人材育成に努めることを第一に考えて取り組むことを再確認できた。

・助成金の活用に関しては，通常の学校配当予算では対応しきれない教材・備品および旅費等の諸経費について，有効に活用して充実した減災教育とその準備を行うことができている点が特筆できる。

・研修会で知り合った指定校の校長や教員との情報交換，交流を図ることができた点も大きな財産である。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・継続して実践的な減災教育に取り組んだことより，児童の減災（防災）の意識化が進んでいる。

・教員や参加した保護者，地域住民の減災意識が高まり，連携して実践に取り組むことができた。

・減災教育に係る予算化により，教材・備品等の将来的な備えを準備でき，保護者の負担軽減が図れた。

②児童生徒にとって具体的な学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・減災や防災という見方・考え方で学ぼうとする意欲，自分の思いを積極的に表出すること

・防災訓練や防災キャンプを通した地域連携の視点，大人とかかわることでのコミュニケーション能力

・有事の際には情報を確実に習得し，適切に対応しようとする姿（態度）

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・学校（児童）を中心にすえた，地域連携による減災（防災）意識とその取組（企画と運営）

・担任サイドからの減災（防災）教育プログラムの教材選定と指導方策の研究・吟味

・地教委や県出先機関等の関係諸団体，地元県立高校との連携・協議。（他の面でも意思疎通が図れた点）

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

・保護者の経済的負担の大きさを考慮し，防災教材・備品の計画的な購入に対して十分に対応できた点

・被災校であることの責務（減災教育の充実，3.11 の教訓をふまえた伝承活動）を再認識できた点

・町内他校への情報提供と取組の波及効果が上がっている点

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

・年度が変わっても，教員が代わっても継続して取り組んでいくことのできる組織・運営の構築を図る。

・風化してきている 3.11 の教訓を，被災校としてあたらめて語り伝えていくことに努める。

・指定校を外れてからの継続的な予算化については課題である。

写真（1）
防災キャンプの避難所運営

写真（2）
防災授業を行っている様子

| 学校名 | 02.埼玉県　川口市立柳崎小学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 楠　けさじ |

| 活動のテーマ | 元気　いきいき　自助　共助 |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（　特別活動　　道徳　） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　全学年　５５０人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ２５人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | １００人　【保護者・地域住民・その他（　　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成２９年6月１９日　～　平成３０年1月１６日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（竜巻） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

「異常気象」という言葉が日常になるほど、子どもたちが生きる時代は、自然災害が身近になっている。そこで、いつどこでも災害は起こりうるという前提で、学び・訓練することが不可欠である。また、一定の秩序の中で助け合うことができる日本社会のよさを継承させるため、守られる存在でいるばかりでなく、できることは行動に移せる子を育成することが大事である。以上の視点を減災教育のねらいとする。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

・自助６月に気象災害から身を守る体験型学習を行う。（青少年赤十字防災教育プログラムより）

| | | | |
|---|---|---|---|
| １年 | 急な大雨から身を守る | ４年 | 災害に備える（対策） |
| ２年 | 地震から身を守る | ５年 | 竜巻から身を守る（シェルター） |
| ３年 | 天気の変化を知り雷から身を守る | ６年 | 災害時シュミレーション |

・自助避難訓練の実施（消防署・警察署の支援）

| | | | |
|---|---|---|---|
| ５月　地震による火災 | ７月　地震 | １１月　地震 | ２月　不審者 |
| 消火器体験・煙体験 | 引渡し訓練 | 休み時間の避難 | 教室に侵入し、確保 |

・自助共助　心のバトンリレー（10/17～ 12/7　１７学級の道徳の授業・児童会募金活動）

| | | | |
|---|---|---|---|
| １年 | ほしになったマル | ４年 | 母へささげる私の誕生日 |
| ２年 | かたもみたい | ５年 | 今年も実れ！たかたのゆめ |
| ３年 | りゅうの松 | ６年 | 地域を支えた石巻日日新聞 or 死にたくない |

・自助共助　防災キャンプ（６年生と１年生の関わり）

事前準備　１時間　（分担・ねらい）

学校公開時に防災キャンプ実施　２時間　（６グループ　保護者参観）

１年生に伝える会準備　４時間　（話合い活動　紙芝居作り　原稿作り）（気仙沼市防災学習シート参照）

１年生に防災について伝える会　１時間

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・「防災キャンプ」の活動内容の変更

計画では、６年生がキャンプ体験を行うだけだったが、階上小と階上中の交流授業を参観し、「広める」という視点で１年生に伝える会を追加した。計画は『気仙沼市防災学習シート』を参考にした。助成金で「紙芝居・カードゲーム・ブルーシート・大型拡声器」を購入し、活動が可能になった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

新規活動である「防災キャンプ」の成果を二つ上げる。先ず、具体的な体験ができた点である。「仮設テント設営・応急救護・要援護者のケア・初期消火」と児童が体験から学んだことが多い。次に伝えることによる深化である。体験で終わらせず伝えることでより深まったと言える。

気象災害の学習もＤＶＤ視聴中心の座学に体験が一層重視されるプログラムに改善された。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

気象災害学習において、簡易シェルター作り、避難持参品の選定、防災鞄の中身検討などこれまで考えなかったことを考え、家庭の現状を省みるなどの変化が見えた。

「自分の命は自分で守る」（自助）意識が深まった。例えば、２月の避難訓練の感想にも「もし本当だったらこわい。全力で逃げないとだめだ」「本当に悪い人が来たら訓練どおりにはいかない」など児童の中に自分のこととして真剣に考える変化があった。それに加え、「できることがある」から「できることをする」（共助）という意識が高まった。またそのスキルも多小は身に付いた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

「防災キャンプ」後の教師の感想に「子どもたちが思った以上に活動でき、頼りになると思った」「高齢化した町会にあり、高学年なら役に立つと思った」など意識の変化があった。

「防災キャンプ」を学校公開時に実施したことにより保護者・地域の方に参観いただけ、「ここまで学校でやっているんだ」等の感想をいただいた。また、給食訓練には保護者も参加したので一緒に活動できる輪が広がった。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

「防災ルーム」を設置していることにより、気象災害学習や心のバトンリレーの学習を臨場感をもって実施できる。また市の防災課の提供により「非常食アルファ米・保存用ペットボトル・保存用ビスケット」を全校児童が試食できる。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

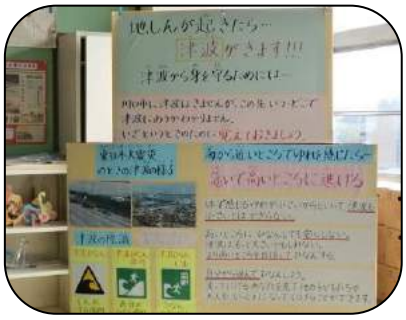
『気仙沼市防災学習シート』を参考にショート防災学習を取り入れ安全教育を見直している。また、今年度は雨天により「地域の防災訓練」が中止になったので次年度、連携を模索する。

【気象災害学習】

【防災キャンプ】

【１年生に伝える会】

【防災ルーム】




【その他】

| 学校名 | 03.長野県　諏訪市立城南小学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 田畑　真志 |
| **活動のテーマ** | 「安心・安全な学校（地域一体になった防災教育）」<br>**（１）　学校全体「考えて行動できる児童・職員」を目指して（意識向上）**<br>**（２）　６年２部「諏訪で起こりうる災害とその対応について」** |
| 主な教科領域等 | 教科領域（行事・給食・総合的な学習の時間・社会） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （１）（全校　５６０人）<br>（２）（４学年　３５人　６学年　３０人） |
| 活動に携わった教員数 | （１）　３０　人<br>（２）　２　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ４００人　【保護者・地域住民・その他（　諏訪市役所危機管理室の方　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成２９年　４月中旬　～　平成　３０年　２月２０日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　） |

活動報告

**１）活動の目的・ねらい**

城南小学校のおかれた環境（十年周期での水害、高い地震発生確率など）を理解し、児童、職員が状況に応じた行動を考えてとれるような減災・防災教育および職員研修などを行う。また、保護者、地域、関係機関との連携を目指す。

**２）実践内容・実践の流れ・スケジュール**

| （１）学校全体 | （２）６年２部「総合的な学習の時間」 |
|---|---|
| ①　避難訓練の見直し<br>・**抜き打ち避難訓練の改善**<br>全校集会を実施し、児童・職員の情報・意識の共有。<br>スモールステップで考える。<br>自己判断を促す障害物。<br>・**引き渡し訓練の改善**<br>保護者に向け、諏訪市における災害の危険性について説明をし、下校時に親子で地震が起きたことを想定した、通学路の危険箇所の確認や避難計画を話し合ってもらう。<br>・避難所開設マニュアルの作成<br><br>②　職員の意識向上<br>・職員研修の実施（諏訪市危機管理室と連携）<br>**「諏訪地域で起こりうる災害について」**<br>**「避難所運営ゲーム」**<br>・防災倉庫の中身見学<br><br>③　保護者、地域との連携<br>・ＰＴＡ主催の秋祭りに防災コーナーを企画。<br>防災倉庫の中身を展示、非常食の試食、防災クイズコーナーなどを行い減災・防災について啓発する。<br>・職員研修にＰＴＡ、学校コミュニティースクールの方にも参加していただく。 | ①　災害やそのメカニズムについて調べ学習<br>②　諏訪地域で起きた災害と体験した方々へのインタビュー活動<br>・災害を体験した方々<br>（保護者、地域のお年寄りの方、先生など）<br>・諏訪市消防書<br>・諏訪赤十字病院<br>・諏訪市危機管理室<br>インタビューしてわかったこと、考えたことを、まとめてグループごとに発表。<br><br>③　避難所体験（２回実施）<br>【１回目】９月体育館１６：００～２０：００<br>児童一人一人が考える「非常時持ち出し袋」を用意し、放課後の体育館で、被災したことを想定して、教員の出す指令に対応できるか挑戦してみた。また、災害時に役立つ技術や考え方を学ぶ。<br><br>【２回目】１月　教室に宿泊<br>前回の経験を素に、考え直した「非常時持ち出し袋」を使って、今度は学校に１泊してみる。寒さから身を守る大切さや火の大切さについて実感する。 |

| | |
|---|---|
| ④　その他<br>・安全マップの改善<br>・防災給食の実施（災害時を想定した給食メニュー）<br> <br> | ④　４年生・保護者への発表会<br>自分たちが一年を通して取り組んだこと、そこから学んだことを、４年生と保護者に向け、発表会を行う。<br> |

３）<u>９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。</u>

・「やっぱり、減災・防災は命を守る学校教育の根幹を成す大事な学習なんだ！」という強い自信をもって、職員や保護者の皆さんに臨むことができた。

・学級活動で避難所体験をする際に、通常では購入しきれない沢山の備品を購入し、考えさせる事ができた。

４）<u>実践の成果</u>

①<u>減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から</u>

・形骸化していた避難訓練の目的を考え直し、実際に必要となる力を養えるような訓練になるように改善。

・まだまだ人ごとになっているようなことを、自分や家族の事として考えてもらえるように、職員研修の実施や保護者に向け備えることの大切さについて発信を行った。

②<u>児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。</u>

・避難訓練を改善したことで、児童が緊張感を持って、自分の置かれた状況から最善の判断と行動をしようとする意識が生まれた。

・体験（避難訓練、防災給食、避難所）をしてみることで、突然のパニックを防ぎ、心のゆとりをもった対応や見通しをもつことにつながったのではないかと感じる。

③<u>教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から</u>

・意識の向上。それに伴い減災・防災への協力姿勢が高まった方たちもいる。

５）<u>自校の実践で工夫した点、特筆すべき点</u>

・（１）学校全体と（２）「総合的な学習の時間」の２本立てで行った。多くの改善を行ったが、形だけでなく共通することは①減災・防災意識の高揚　②状況に応じて考え行動する　この２点を大事にした。

６）<u>実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望</u>

・誰もが減災・防災について大事なことだとは認識している。しかし、それを実際に改善したり、コーディネートしたりし、高い意識を持って実行していく人材がいないと事は動かない。改善・持続されていく校内の流れを作っていくことが大事。

・来年度は地域連携を強化したい。

| 学校名 | 04.愛知県　名古屋市立内山小学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 横井　成美 |

| 活動のテーマ | 地震てんでんこ　～自分の命は自分で守る子どもを育む～ |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（総合的な学習の時間・学校行事） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　全　　学年　１２３　　人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | １３　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 児童の保護者全員　【保護者・地域住民・その他（　　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成２５年　４　月　１　日　～　平成　３０　年　３　月　２０　日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　災害後の暮らし　） |

活動報告

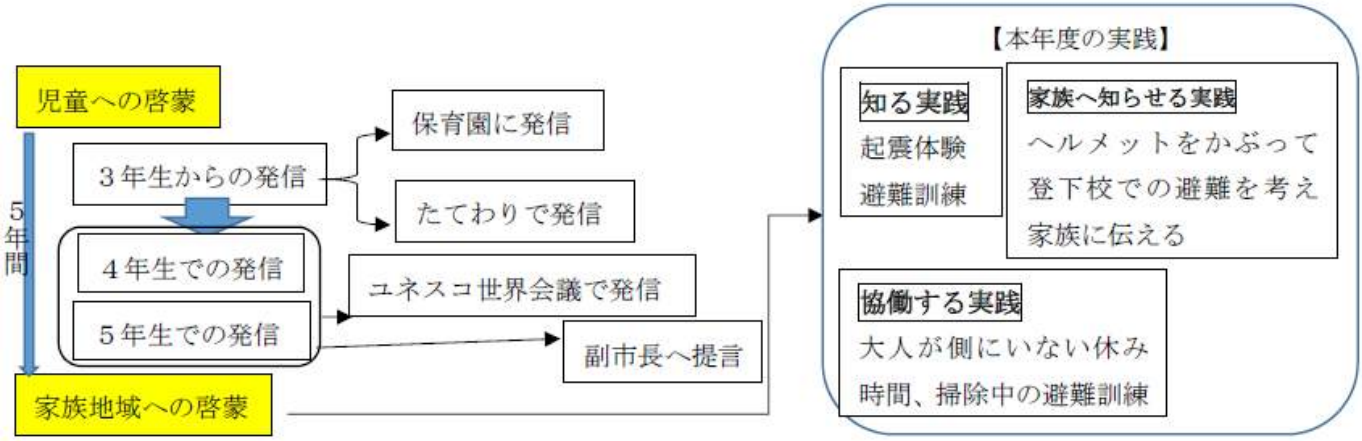
１）活動の目的・ねらい

学区には３車線の幹線道路、地下鉄、JR の駅があり、オフィスビルや繁華街を抱えている。大きな震災時には、帰宅困難者であふれ、交通の途絶、繁華街からの火災など混乱が予想される。そこで学校での避難訓練だけでなく、学区で地震が起こった場合や被災後までを想定して児童一人一人が自分の命を自分で守るように育てていかなければならないと考え、５年間を掛けて保護者・地域・学校の一体化を目指し、以下の流れで防災を目指してきた。

地震のこわさを知る→身を守る方法を考える→家族と一緒に考える　児童から家族への啓蒙活動→震災後の暮らし

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

本年度は、地震の怖さを味わうために起震体験をした上で身を守る方法を考えた。また、異学年や同学年で声を掛け合って避難する体験や、被災後、ヘルメットをかぶりながら帰宅する体験を以下の流れで行った。本年度特に考えたのは、家庭へ啓蒙を視点において行った。




３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

児童全員にヘルメットを購入し、ヘルメットをかぶりながら通学路を歩き、実際に地震が起こった場合を想定して危険な場所や逃げるのに安全な場所を見付けながら帰宅したり、登校したりする実践を行うことができた。これは、９月の研修会で見学した学校でヘルメットが教室の後ろに置かれていたのを見て、身近にヘルメットがあると、さらに児童がいざとなった時に身を守ることができると考えた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

ヘルメットをかぶることで、児童自身が災害について自分ごととしてより捉えることができた。また、登下校の様子を見ていた地域の人への啓蒙及び、家族の災害に対する気持ちが変容してきた。本校の保護者にアンケートをしたところ、災害時のために備蓄している家庭は、半分以下だった。そこで、ヘルメットをかぶって帰った日に家族に地震が起こった場合にどうしたらよいか家族で話し合ってくるように児童に宿題を出した。すると、「家族で家の周りを歩いて、危険な所を見に行った。」「家の中で地震が起こった時に、どうするか話し合った」「水やレトルトを３日分買った」など、児童から発信したことで家族が地震について考えるようになった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

本校は児童数が少ないため異学年での活動を盛んに行っている。休み時間や清掃中など大人が側にいない場合に不意に起こる地震を想定した避難訓練を数回行った際、異学年で声を掛け合う姿が多く見られた。児童の行動が避難訓練という点から児童会活動などの他の活動と線でつながっていくのを目の当たりにした。高学年、低学年関係なく、大きな声を出し合い、互いの身を守る行動は地域でも生かされると考える。

また、通学路で地震が起きたことを想定して、危険な場所と逃げるのに安全な場所を見極めたり、震災後、がれきの中をヘルメットをかぶって歩く練習をしたりする実践で、低学年でも自分ごととして捉えながら、家族と話し合うことができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

本年度は、避難訓練で学んだことを家族に伝えたり、話し合ったりする宿題を必ず出している。家族と一緒に家の中で避難訓練を行った児童や災害時に家族で集まる場所を決めた児童がいた。また、窓を開ける人、扉を開ける人など、役割分担をした家族も出てきた。子どもから真剣に相談されると普段から防災に消極的な家族も、これをきっかけにして、家具の転倒防止を考えたり避難袋を用意しようとしたりと、積極的に防災に取り組もうとする保護者の姿が見られた。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

本校では、毎年の防災教育を少しずつ進化させたいと思い、点から線への実践を心がけている。すなわち、初年度は、一学年で徹底的に防災に取り組み、防災リーダーを育て、子どもたちから子どもたちへ防災の輪を広げていく。その後、それぞれの子どもから保護者へ広めていくという展望のもとで行った。それぞれの流れは一方通行ではなく、スパイラルにまわりながら進化を続けている。子どもから子どもへの啓蒙は、校内や、学区の防災マップを使って他学年に教えに行ったり、学区の人に頼まれて子どもたちが学区の危険を話したりしている。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

児童の防災に対する意欲をここで終わらせず、本校の伝統として継続的に防災教育を行っていきたい。これまでは、取り組みに試作段階のものもあった。これを、教員が転任しても続いていけるようにそのカリキュラムを確固たるものにしていきたい。

| 学校名 | 05.岡山県　岡山市立曽根小学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 鈴木　学 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 誰もが暮らしやすい曽根にするために，災害から身を守ることについて調べ実践しよう。 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　総合的な学習の時間　，特別活動　） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　第５学年　２２人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ４　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ２５　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成　２９年　４月　８日　～　平成　３０年　２月　１０日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

ＥＳＤ教育の視点に立ち，南海トラフ地震や洪水・台風などの災害から，自分や大切な人の命を守るための正しい知識や判断力を培い，率先して地域に貢献する力を養う。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

**Ａ．５年「総合的な学習の時間」（２６時間）**

①【知る】

ア　地震を知る

・「ぼうさい授業」（東京海上日動火災による出前授業）

・「地震体験学習」（岡山市南消防局の地震体験車）

・「伝言ダイヤル学習」

・「６年目の東日本を訪ねて」（校長による授業）

イ　岡山市・曽根学区の防災・減災を知る。

・曽根地区が受けた過去の災害を学ぶ。

・岡山市ハザードマップ（津波，洪水）を使って学ぶ。

②【追及する】

・防災に関するテーマを決め，班単位で調べ学習を行う。

・例　曽根小学校に整備されている防災施設を調べる。（備蓄倉庫，緊急応給栓，避難所　等）

③【まとめる】

・土曜参観日に発表会を行う。

・質疑応答の時間を設ける。（保護者にも質問してもらう）

・プレゼンの工夫（模造紙，プリント，パワーポイント，実物提示，実演など）

④【活用する】

・防災食づくり（パッククッキング）の実習

※強化ポリエチレン袋に食材を入れ，沸騰した湯で加熱し，暖かい食べ物を作る。五目御飯やリゾットなど袋を分けることで一度に何種類も作ることができる。

Ｂ．５・６年特別活動（２時間）

・心肺蘇生法研修・・・日本赤十字社岡山県支部の青少年赤十字提供プログラム「救命コース」活用

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・平成２８年度の和歌山市立高松小学校の発表を参考に，５年の総合的な学習の時間の年間指導計画を見直した。

・東日本大震災をリアルな出来事としてとらえ，教訓を学ぶことを目的に，教員研修会での資料や写真を使って，校長による「６年目の東日本を訪ねて」の授業を５年生で行った。

・教員研修会で研修した階上小学校・階上中学校の防災授業，震災遺構の向洋高校視察，事前に訪れた大川小学校の写真等を用いて「６年目の東日本の現状と防災教育について」と題した職員研修を行った。

・助成金を活用してプリンターを購入し，カラー刷りの学習プリントを作成したり，調べ学習の資料を印刷したりした。また，防災食作り実習を行った。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・これまでは訓練主体の防災教育であったが，５年生の総合的な学習の時間を減災教育の中心に据えることで，探究する減災教育となり，継続して取り組む体制ができあがった。また，ＥＳＤ教育の具現化につながった。

・防災食作りの実習を通して，アイデア次第で避難所生活を改善できることを児童も教員も学ぶことができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・児童は主体的に減災・防災について考え，課題を持って家庭や地域を見直すことができ，防災対策が不十分な箇所や状況があることを自ら学んだ。また，学んだことを保護者や地域に発表することで，自分や大切な人の命を守ることへの意識が高まった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・教師にとって，減災教育は生きる力を学ぶ重要な教育であるという視点に気づかされた。

・地域や保護者にとっては，地域防災を持続可能な地域づくりの核として位置付けるきっかけとなった。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

・【知る】の指導を担任だけに任せると担任の意欲や理解度によって差を生じる。出前授業や実習を取り入れることで減災・防災に対する基本的理解を一定の水準に保ち，継続できるようにした。

・【まとめる】では，今年は発表会を参観日に行った。（昨年度は地域防災訓練の日に，地域住民に向けて行った。）発表の場を大勢集まる場にすることで，児童の学習意欲をより高めるようにした。

・防災食作りや心肺蘇生法研修を取り入れることで実生活と結びつけ，減災教育を活きた学習とすることに留意した。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

・５年の総合的な学習の時間に減災教育を位置付けて２年目となるが，ねらいが教員に十分浸透しているとはいえない。【知る】や【活用する】の指導プログラムを開発・充実させることが，減災教育を継続発展させる鍵となる。

・今年，６年間毎年，土曜授業日に行ってきた曽根学区民防災訓練の実施が見送られた。主催団体の高齢化やマンネリ化などが原因である。小学校が今後も減災教育について地域に情報発信し，新たな防災の取り組みを呼びかけることで地域と連携していきたい。

## 補足資料

### ５年総合的な学習の時間

【知る】

［出前講座　地震全般の解説］

［出前講座　実習］

［校長授業プレゼン］

［地震体験車　説明］

［地震体験車　体験］

［岡山市ハザードマップ］

【追及する】

［調べ学習］

［発表の練習］

［参観日発表］

【活用する】［パッククッキング］

［材料］

［袋詰め（空気を抜く）］

［湯煎］

### ５・６年特別活動

［心肺蘇生法研修］

［心肺蘇生実習］

［防災食の会食］

| 学校名 | 06.徳島県　上板町立高志小学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 井上　晃典 |

| 活動のテーマ | 東日本大震災から学び，自ら考え，判断し，協働して行動できる子どもの育成 |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（総合的な学習の時間・学校行事） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　　1～6　　学年　　１３９　　人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | 4　　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 約５０　人【保護者・地域住民・その他（町役場企画防災課）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成　29　年　9月21　日　～　平成　30年　3月22日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　） |

活動報告

1）活動の目的・ねらい

・校長，安全主任が中心になり教職員の危機管理意識を高めるため

・過去に災害を経験・克服した地域・学校の現実から学び，減災のための知識・技能の習得と実践行動力を体験的に学ぶため。

・保護者・地域住民に対しての啓発活動を行うため。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

【避難訓練】

・校内地震，火災避難訓練（５・１２・１月）

・緊急時引き渡し訓練（７月）

・避難訓練後に，安全主任が東日本大震災の被災地で学んだことについて児童全員に伝える。

【防災学習】

・気仙沼防災学習シートを活用した安全主任による防災学習（５・６年生の学級活動の時間に）

【校内研修】

・全教職員に向けて，東日本大震災の被災地で学んだことについての報告。

【その他】

・気仙沼で学んだことを大型の掲示物に表し，校内１階玄関横に掲示をした。(11月)

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・防災学習年間指導計画の見直し。

・東日本大震災の現地の写真，動画等を中心にした被災の現実から学ぶ防災学習の展開。

・災害時の備蓄品(水，食料)を購入し，設置することができるようになった。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・防災学習年間指導計画の見直し。(参加体験型の防災学習を導入する)

・東日本大震災の現地の写真，動画等を中心にした被災の現実から学ぶ防災学習の展開。

・災害時の備蓄品(水，食料)を購入し，設置することができるようになった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・南海地震に対しての危機意識を高めることができ，防災学習の重要性を認識できた。

・自然災害発生のメカニズム，被害，避難等の減災についての知識を習得することができた。

・地震の際の危険，避難経路の確認，防災バッグ準備，中身の確認，などを行うことができ，減災のために必要な技能を学ぶことができつつある。

・避難所生活の実態から，災害発生時には共助（近くの人と助け合う）の態度が大切であることを学んだ。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・教職員にとって，地震を中心にした防災学習を充実する中で，自然災害に対しての危機意識を高めることができた。

・家族全体で減災について考えなければならないという意識が高まりつつある。

・校長の学校便りで防災について記述することにより，保護者，地域の方に啓発することができた。

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

・安全主任の現地視察の報告等から，児童が東日本大震災の被害から具体的に学ぶ事ができた。

・気仙沼の防災学習シートを参考に防災学習の内容の改善を行っている。

・現地で学んだことを掲示物に表し，校内に掲示することで，児童への防災意識を高めることができた。

・教職員が気仙沼の状況をリアルに知り，真剣に考えることができた。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

・減災教育に関しての教職員の危機意識の高揚の重要性。

・減災学習の内容の改善と学年間の系統性の再検証。

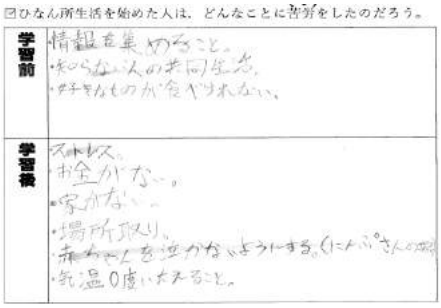
・町役場企画防災課と連携し，災害発生時の協力体制について話し合う。

・自主防災組織，町役場企画防災課と連携し，校区内の防災マップを新たに作成する。

7）その他（※特にあれば記述）

↑助成金により，備蓄品の購入

↑校内に防災掲示物の作成




↑児童のワークシート抜粋

| 学校名 | 07.愛媛県　新居浜市立惣開小学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 日野　優子 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 地域防災の自立連携に向けた防災・減災教育の推進<br>～多様なステークホルダーと「関わり・つながる」活動を通して～ |
| 主な教科領域等 | 各教科等・特別活動及び総合的な学習の時間　　） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　　全学年　　３５００人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ５５　　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ８０５　人　【保護者・地域住民・その他<br>○保護者・地域住民　６００人、○幼稚園児１０６人、○消防団２８人、○水道局４人、○市防災安全課等４人、○消防署３０人、○県建築住宅課５人、○日本赤十字社２人、○新居浜ひうちライオンズクラブ１８人、○市教育委員会５人、○大学３人）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成　２９年　４月　２０　日　　～　　平成　３０年　２月　１０日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>(地震)・(津波)・(台風)・(洪水)・(河川氾濫)・(土砂)・その他（　　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

- 学校と家庭、地域、多様なステークホルダーとの連携により、学校防災力、家庭防災力、地域防災力の向上を図るとともに、地域防災ネットワークを構築し、地域防災の自立連携を推進することで、「災害に強いまちづくり」を実現する。
- 「防災・減災」を通して、学校と家庭、地域をつなぎ、様々な人と人の絆を深め、地域を元気に、愛のある愛顔いっぱいの惣開の町をつくる。
- 災害時に自分達にもできることは何かを考え、ともに支え合い助け合っていこうとする共助力やセルフ・リーダーシップ、ボランティア精神を身に付ける。将来の防災リーダーとなる人材を育てる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

- 全校防災教室や防災講演会、気象庁出前講座、赤十字血液センター　出前講座の開催。（年間指導計画）
- 合同総合防災訓練、避難所生活体験シミュレーション訓練の実施。（9 月、10 月）
- 徳島県松茂町立長原小学校との防災学習交流会の実施。（10 月）
- Ｊアラート緊急地震速報訓練、地震・火災対応避難訓練等の実施。（年間指導計画による）

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

＜変更・改善点＞

- 関係機関の代表者と合同総合防災訓練の打合せを事前２回・事後１回、開催していたが、きちんとした組織として立ち上げていなかったので、惣開校区防災・減災推進委員会として立ち上げた。
- ４年生の児童が消防署と連携して、防災学習する際、三角巾や簡易担架などの防災スキル学習に保護者も子ども達と一緒に参加できるよう案内し、防災ママ（合同総合防災訓練での活動班のリーダーとして活躍して頂く）を育成。５人の防災ママが、主体的に応急処置班のリーダーとなり活躍した。
- 合同総合防災訓練のけが人救助班活動（バールやジャッキ、板などを使って、けが人の人形を救助）で、

教員がこれまで主のリーダーで入っていたが、ＰＴＡの防災リーダー育成のため活動班の運営を任せた。

● 助成金で購入した車椅子やアルミ製の軽いリヤカーを、総合防災訓練で、足の不自由な方やお年寄りの避難の際に活用できるようになった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

● 総合防災訓練では、これまで保護者は活動班に参加してもらい一緒に体験する側で、教員や関係機関のリーダーがいるので、声をかけてもらったり、説明してもらったりしていた。そこで、保護者自身が自らセルフリーダーシップをとれるように、活動班を一つ任せたことで、主体的に考え、防災・減災への意識を高めることができた。けが人の応急処置班で主体的に活動した「防災ママ」も、同じ保護者同士で説明して教えてあげたり、防災意識を高めることに繋がっていた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

● 自分の災害時はお客さんではなく、避難所設営・運営の主体者として率先して「気づき・考え・行動しよう」とするアクティブな児童の姿が見られるようになった。自分も他の人の命も、かけがえのない大切な命であることを理解し、共に助けあって行動できる力が育ってきている。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

● 今年は雨の中、初めて校舎や体育館を使って、総合防災訓練を実施したが、雨の中、天候の悪い中の訓練であったため、より意義があったという感想だった。寒さに対しての防寒や水の大切さ、携帯トイレや非常持ち出し品の準備、家族との連絡方法など、一人一人が危機意識をもって、日頃から「明日は吾身」と真剣に防災意識を高めておかなければという感想が聞かれた。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

● 雨の中、実際の災害を想定して、幼稚園児・児童を含め参加者１０００人近くを、どのように体育館と校舎内に収めていくか、避難所受付を終えた後、訓練ではあるが、どこに待機させればうまく進行できるか、校舎の教室のどこを解放するか、渡り廊下を含めてどのように訓練場所を設置するか、１０００人近くが混乱せず、スムーズに動け、様々な訓練を体験できるよう工夫した。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

● 総合防災訓練では、これまで、晴れの場合のやり方で、１０００人近くにもなるので、運動場に避難させてから、運動場や体育館、校舎を使って大規模に訓練を展開してきたが、雨の場合でも、避難場所を体育館や教室と分けて収容し、開会式を放送版と体育館版、防災講話のもち方の工夫、各活動を教室や渡り廊下も活用して行えば十分可能であり、保護者からも大変実践的で良かったという感想であった。

７）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。

＜新居浜市立惣開小学校　　補則資料　合同総合防災訓練の様子　雨天対応＞

各自治会ごとに地域住民の避難者受付

教員による児童の避難者受付

地区ごとに区割りし避難した体育館内（開会式）

県住宅建築課による耐震住宅に関する出前講座

非常電源班でのやり方を学ぶ児童

段ボール簡易トイレの組立を学ぶ保護者

炊き出し班でおにぎりを配る

簡易パーティションを組み立てる児童

組み立てたＢＯＸパーティション組立

日本赤十字社によるハイゼックスを使った炊飯

けが人救助班でけが人役の人形を救出

三角巾を使った応急処置法を学ぶ

煙体験で鼻と口を押える幼稚園児たち

ＡＥＤを使った心肺蘇生法を学ぶ

給水車から水を汲む体験

児童引渡し訓練の様子

| 学校名 | 08.北海道　釧路市立山花小中学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 下村　伸大 |

| 活動のテーマ | 自然災害 … そのときあなたはどうする？ |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（　総合的な学習の時間　） |
| 活動に参加した児童生徒数 | ８学年 19 人（小学校１・３・４・５・６年生，中学校１・２・３年生） |
| 活動に携わった教員数 | 13　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 保護者 17 人　・　地域住民 ８人 |
| 実践期間 | 平成 29 年 ６月 １日　～　平成 30 年 ３月 23 日 |
| 想定した災害 | 地震 ・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（火山噴火） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本校は、釧路市街に位置する小規模の小中併置校であり、児童生徒の 80%は、市内の様々な地域から通う特認校である。児童生徒は保護者運転の自家用車による送迎で通学しており、通学時間は平均すると 30 分以上要する状況である。そのため、登下校途中での被災の可能性も高く、その際の行動様式を個々の通学の状況に応じて保護者と共に考えさせ、それにしたがって行動できる実践力を育てることが重要である。

また、学校が避難所としての役割を有していることから、在校時に災害が発生した場合、避難してくる地域住民の受け入れや児童生徒でも可能な避難所でのボランティア活動等を想定した学習や演習を教育課程に組み入れ、より積極的な防災(減災)の意識や実践力の向上をめざすものである。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

◇減災教育オリエンテーション（９月１日）

児童生徒に対し、日本は地震や津波など大きな自然災害が起きやすいことや東日本大震災の様子を伝えた。その上で、減災教育の必要性や本校で行う減災教育のロードマップを示した。

◇非常食の試食会・減災教育の取組の発表会（10 月７日）

収穫祭の中で、中学校３年生が取り組んだ非常食づくりの研究成果発表とその試食会、市教委提供のアルファ米の試食、段ボールベッド体験など、これまでの減災教育の取組を保護者・地域住民と共有した。

◇親子防災教室（10 月 21 日）

親子で自然災害の危険性と有事にどのように命を守るかを考えた。特に、車での登下校時に災害が起きたときの避難経路と避難場所の確認、通常の登下校の経路における高い建物や場所の確認を行った。

◇避難所運営ゲーム（Ｄｏはぐ）体験教室（12 月 20 日）

地震やそれに伴う津波などの災害時に「もし学校が避難所になったら、どのように運営をするのか」を運営する側の行動や配慮などについてカードを用いたゲーム形式で学んだ。

◆各教科等における実践

【理科】気象台の職員を講師に、火山の危険性や噴火した際の注意事項等を学んだ。【技術・家庭】紙の模型を用いて強度のある構造について学んだ。また、部屋の家具の配置について、地震を想定したときの正しい配置について学んだ。【数学】津波の速度が水深の 1/2 乗に比例することから、水深からおおよその津波の速度を求めた。【道徳】福島県の震災に関わる副読本から、被災者の立場や心情を考えることを通して、思いやりの心について考えを深めた。

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

被災地での減災教育の視察や研修会での専門的な学びから、減災教育を指導する側として、あるべき心構えをもつことができた。そのため、避難行動の様式を繰り返す訓練から、どのようにすれば自他の命を守ることができるのか状況を判断し、望ましい行動を考えるような活動を増やすことができた。また、助成金を受けることで、通常ならば優先順位が低くなる災害など有事への備えに対する備品や教材の購入が可能になった。そのため、実物を示しながら非常持ち出しグッズの確認ができたり、乾燥野菜による非常食づくりをしたりすることが可能となった。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

減災教育を各教科等の教育課程の中に位置付け、計画的かつ実践的な授業を十分に確保することができた。そのため、各分掌の仕事に適切に減災教育を振り分けることができ、学校全体で取り組む態勢を整えることもできた。また、減災教育が災害に対する備えに閉じることなく、各教科等と減災教育を関連させることや教科と教科を減災教育をとおして関連させることができ、教育課程を新たな視点で見直すことにもつながった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

減災教育をとおして、改めて生命尊重の気持ちや自他の命を守ることの大切さを学ぶことができた。そのことにより、避難所運営ゲームでは様々な事情に対して細かな配慮ができたり、日常においても思いやりの心をもって生活できる児童生徒が増えた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

保護者や地域の方々からは学校教育評価等で減災教育の取組について高い評価を頂いた。特に、一般の学校ではなかなか取り組めないものではあるが、生きていく上でとても大切な学びを教育課程に位置付け、学校全体で取り組みを進めていることへの評価であった。また、災害の際に、どこに避難するか、どこが安全かを参観日に家族で考える機会を設けたことで、保護者や教員の減災防災意識も高まった。

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

本校は釧路市の郊外にあり、自然に恵まれた学校であることから、広大な学校農園を活用した栽培学習を行っている。そのため、学校農園で収穫した大根やかぼちゃ、ごぼう、ニンジンなどを乾燥させ、長期間保存できる食材づくりやその食材を使った非常食づくりは本校の特色を生かした減災教育と言える。また、小規模の併置校であるため、地域や保護者との関係も親密であることから、学校・地域・家庭の三者で集まって行った避難所運営ゲームも本校の特色を生かした活動と考える。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

災害によりどんな甚大な被害を受けようとも、優先されるべきは生命の尊重であり、全ての人が協力して苦難を乗り越えていくことが大切であることを、改めて学ぶことができた。また、そのために必要となる考え方やスキルを少しずつではあるが身に付けることができた。ただ、この取組が一過性のものとならないように適切に教育課程に位置付け、継続した取組を行う体制づくりをする必要がある。ただ、本校における減災教育の質の向上を図るだけでなく、地域に減災教育の必要性やその具体的な方法などを発信できる学校を目指していくことも大切である。

7）その他（※特にあれば記述）

特になし

## 減災教育オリエンテーション（９月１日）

登校時の経路の確認と経路上の避難施設の確認

ミサイルに対するＪアラート発令時の避難訓練の様子

## 非常食試食会，減災教育の取組の発表会（１０月７日）

かぼちゃチップスの試食

学校農園で収穫した野菜を乾燥機にかけ、保存食をつくる取組の様子

段ボールベッド作成の様子

段ボールベッド使用の様子

お湯を注いで温かいご飯ができあがるアルファ米の試食の様子

## 避難所運営ゲーム（ＨＵＧ）　北海道版～Ｄｏはぐ～（１２月２０日）

オリエンテーションでの講師による説明

避難所運営ゲームに取り組む参加者（児童生徒，保護者，地域住民）

| 学校名 | 09.岩手県　岩泉町立小本小学校　　岩泉町立小本中学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 野崎　祐司　(小本小学校副校長) |

| 活動のテーマ | 「生き抜く力を育む防災教育の推進」<br>～主体的・協働的な教育活動および小中連携の取組を通して～ |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（　総合的な学習の時間・道徳・特別活動・学校行事　） |
| 活動に参加した児童生徒数 | 全学年　　小学生　６１人　　中学生　４０人　　計１０１人 |
| 活動に携わった教員数 | 小学校　１８人　　中学校　１５人　　計　２３人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ３１８　人【保護者・地域住民・その他（行政機関関係者）】　※地域総合防災訓練時<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ，人数をお書きください。(複数可) |
| 実践期間 | 平成２９年４月１０日　～　平成３０年３月１８日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　） |

活動報告

１）活動の目的

「生き抜く力を育む防災教育」

小本地域の児童生徒が，復興・発展を支える人として成長していくためには，東日本大震災とH28 台風１０号による災害を乗り越えるとともに，これらの経験を活かし，自然や社会の様々な変化や状況で「生き抜く力」を身に付けさせることが必要であることから。

２）主な実践内容と流れ，スケジュール

【小学校】

①「いわての復興教育」副読本の活用

「いわての復興教育」副読本…震災後に県教委により作成され，県内全小中学校に配付されている。復興・防災教育の充実のため，各学校において通常の教育活動で効果的に活用することを期待されている。

**授業計画・実践**
・担任が活用方法をマネジメントし，毎月の朝学習時間，教科等時間で活用

→ **記録・年計の整備**
・各担任は，月毎の実践内容を記録

→ **副読本を活用した学習参観**（H29.11.5）
・地域防災避難訓練後の３校時，副読本を活用した学習を保護者の方へ公開
・保護者もいっしょに考え，参加する授業

②社会科見学や生活科探検，宿泊学習等の校外学習と関連させて防災意識を育てる

**事前指導**
・見学場所等において想定される災害と避難について考える

→ **校外学習**
・避難経路の確認
・周囲の安全の確認
・疑似体験

→ **振り返り・事後指導**
・対話や小グループでの感想交流
・振り返りカードの記入
・指導者が学びを他と関連付けたり拡張したりする

【中学校】

③「全校道徳授業」

**授業計画（指導案作成・検討）**
・昨年度の防災マップ作り学習で明らかになった課題「協働の意識が低い」の解決のため，本時の指導の在り方について研究
・本時指導案作成と地域や保護者への参観案内

→ **授業研究会**（H29.７.２４）
・自分の命を守ることを最優先とする考えを大事にする
・災害時の差し迫った状況下において，自分が他者のために何ができるか主体的に考え，対話を通して自己の考えを広げたり，深めたりする。また，考えの多様性を尊重する

→ **防災マップ作り**
・「協働」の視点を入れて防災マップを作成

④防災マップ作り

**事前指導・情報収集**
・地域の危険箇所の情報を収集すること
・「協働」の視点から
　→近所の住人を把握しておくこと
　→弱者の避難の仕方や経路等についても想像してみること

→ **全校生徒での防災マップ作り**
・地区ごとに調べてきた通学路と地域の危険箇所について話し合う
・学校や家ではない場所で近くにお年寄りと幼児がいることも想定して考える
・地区ごとにマップを作成

→ **マップ掲示**
・１階ホールに掲示し，小学生児童や保護者・地域へ向けて情報を発信

【小中連携】

⑤各種合同避難訓練

**事前指導**
・災害の種類と安全な避難等について考え，確かめる

→ **各種合同避難訓練**
・4/25 小中合同避難訓練（火災：授業中）
・9/1　保・小中合同避難訓練（地震・津波：清掃中）
・11/5 地域防災避難訓練（地震・津波：**登校中**）
　※小中・保護者・地域・行政合同での実施

→ **振り返り・事後指導**
・対話や小グループでの感想交流
・振り返りカードの記入
・第３者による全体講評

**⑥地域防災避難訓練**（１１月５日（日）実施）

（ア）小中各担当者

**事前打合**
・役場防災対策室，地区自治会団体，支所，スクールバス運転手等との連絡調整

**訓練細案作成と教職員の共通理解を図る**
・ねらいの確認
・教職員の動きの確認
・事前・事後指導の具体について確認

**保護者への周知**
・休日であるが登校日として訓練を行うこと
・朝の登校時間に行うこと
・同日に学習参観，下校時に引渡訓練を行うこと

**反省**
・教職員より反省をとりまとめ，次年度への改善を図る
・行政と反省をつき合わせ，次年度へいかす

（イ）児童生徒

**事前指導Ⅰ：各学級**（小学校）
全校生徒（中学校）
・災害日時と災害の大きさ，初期対応と避難時の鉄則等を考え，確かめる
・中学生は，共助・公助についても考える

**事前指導Ⅱ：登校班毎（小学校）**
・災害時の場所に応じて，適切な避難の仕方を考え，確かめる
・小学校上学年は，共助の在り方についても考える

**地域防災避難訓練**
・揺れが収まるまで安全確保
・近くの避難場所高台へ避難

**振り返り・事後指導**
①各学級→②登校班毎（小学校）
・学びを交流，成果と課題を確かめる

３）９月研修会の学びを通して

①自校の実践に活かしたこと

・「自助・共助・公助」についての教職員の理解を深め，児童生徒への事前指導を確かなものとして地域防災訓練を行った。

・防災・減災教育の意義と育て身に付けるべき力について教職員の共通理解を図り，防災・減災教育の推進を図った。

②研修会を受けての自校の活動の変更・改善点

・日常の教育活動の中において防災意識を育てていく必要性について教職員の共通理解を図り，実践化を図った。

・防災・減災を「自分ごととして捉える」意識を高めさせるために，児童生徒による話し合い活動を意図的に位置付けて大切に指導した。

③昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・教職員の防災・減災教育への意識を高めさせたことで，児童生徒の学びに向かう姿勢も主体的且つよりよいものとなった。

・緊急時の児童生徒・教職員の安全確保に関る現有物品をチェックし，ラジオや懐中電灯等の不足分を揃えることができた。

４）実践の成果　［　**⑥地域防災避難訓練**について　］

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・登校時間の災害を想定した訓練を計画したことにより，登校途中の通学路において，その場で判断して適切な避難行動をとることが困難であるという児童生徒の実態が明らかになった。その後の指導と次年度計画への改善につなげることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学びがあり，どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・「自分の命は自分で守る」ために，災害を想定したときに起こり得る危険，そして，それに応じた安全確保と避難について想像する力を高めることができた。

③教師や保護者，地域，関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・地域一丸となった防災訓練は，それぞれの立場で防災意識を一層高める結果となった。

・教職員にとっては，命を守るために様々な人や機関が有機的に結びつき関っていることを実感することができ，考えを深めることができた。

５）自校の実践で工夫した点，特筆すべき点

・小中連携による避難訓練を当たり前に行っている。その際，小中担当者を中心に連携を密にとりながら計画している。更に，保育園と連携した避難訓練や地域や関係機関と連携した実効的な避難訓練を実施している。

・児童生徒による主体的な話し合い活動を核に据え，課題解決や振り返りを位置付けている。

・防災教育の様子を学習参観日に位置付けて公開し，保護者の意識も高めているところ。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

・本校の現在の防災・減災教育を見直し，必要に応じて適切な学習へ改善を図り教育課程へ明確に位置付けて実践を継続していくこと。また，外部専門機関との連携についても積極的に計画していくこと。

・避難所指定であることから，中学校を中心に避難所運営に関る訓練を行政と連携して行うこと。

【補助資料：実践記録】

## ①「いわての復興教育」副読本の活用

**［H29.9月実践記録から抜粋］**

| 学年 | 副読本活用P | 児童の反応など |
|---|---|---|
| 1年 | ５９Ｐ<br>ショート訓練をやってみよう | 副読本の他に緊急地震速報の音を聞かせて，実際に安全を確保する行動を繰り返し行った。初めて聞く音に驚いていたが，身を守る方法について既習も活かして考えていた。 |
| 2年 | １０Ｐ<br>はしれ釜石キッチンカー | 小本にオープンした愛土館の様子を聞き，小本の人たちが，「津波でまちが淋しくなったのでみんなが楽しめるところをつくりたい」という思いでつくったことに気づいた。「地域の復興に役立ちたい」という釜石キッチンカーのお話と同じ思いであると気づいた。 |

**［副読本を活用した授業の様子］**

**［副読本活用による学習参観：4年実践例］**

私は、二番目に飲み物と考えたけれど、親に、「水のほうが傷口などを洗えるよ。」と言われた時、飲み物がいいわけではないと思いました。

防災リュックに入れる物を四つえらぶのは、すごく難しかったけれど、お父さんに教えてもらって選ぶことが出きました。

今日は、明治、昭和と自分の生まれる前から、大きな災害があって、たくさんの人がなくなったりしたけれど、それに対するそなえがあればよいことがわかりました。

今日は、おうちの人といっしょに学習をしました。私たちの意見のほかにも、おうちの人の話を聞くことができたのでよかったです。

津波や地しんは、いつ来るか分からないということが分かりました。これからは、いつ災害が来ても対応できるようにします。

小さかったけれど、大震災の時、津波から必死で逃げたことを覚えています。

私は、ライフラインが止まった時のために、持っていくものなどを親ときちんと話し合おうと思いました。

今日は、みんなで話し合い、防災リュックに入れる物をたしかめました。いろいろな物が出たので、災害のときに持っていきたいです。

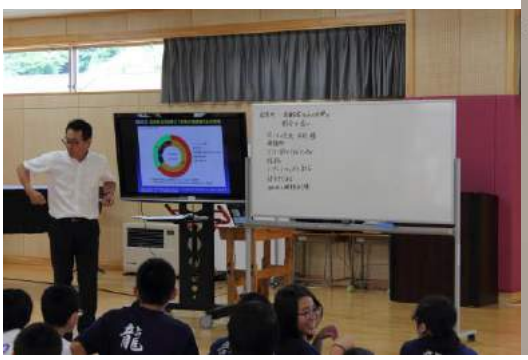
## ②社会科見学や生活科探検，宿泊学習等の校外学習と関連させて防災意識を育てる

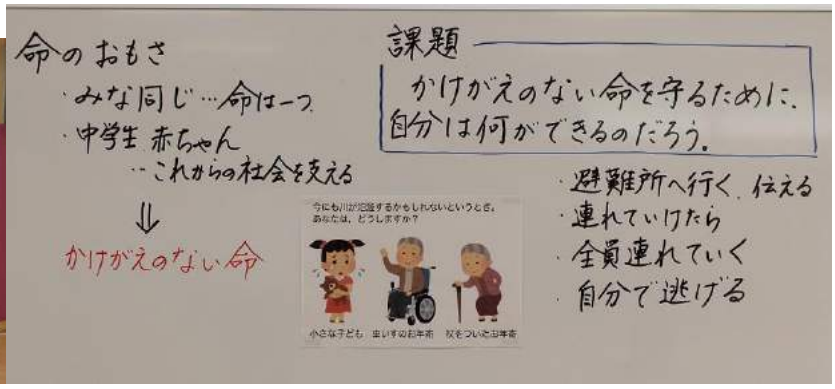
**［生活科探検：1・2年実践例］**

追体験後、小グループで感想交流

生活科探検の中で、震災時に実際に避難に使った階段を追体験

③「全校道徳授業」





自分たちが住む地域の現状を知り，近隣やその人々に目を向け，「どうすることがよりよいことか」について話し合う

④防災マップ作り

夏季休業中に収集した情報を互いに共有し，話し合いを進めながら必要な情報を付箋に書き出して防災マップに落とし込んでいく

⑤各種合同避難訓練

4/25　小中避難訓練

9/1　保小中避難訓練

11/5
地域防災避難訓練

津波警報解除の合図で、各避難場所から地域防災センターへ全員が集合

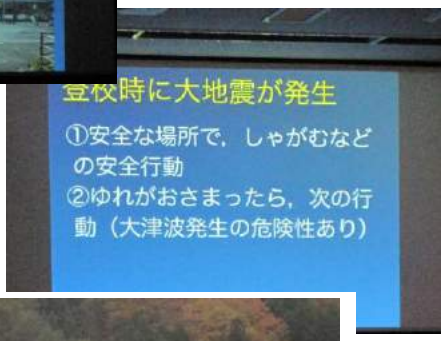
⑥地域防災避難訓練（１１月５日（日）実施）

10/17 学校・行政・各地区代表者・関係機関等事前打合

10/24　スクールバス運転手事前打合

11/2　小学校：学級→登校班　事前指導

11/1　中学校：全校事前指導




11/5　午前７：52　　避難警報発令

校舎裏山高台へ避難した小中学生や保護者

防災センターから登校後，各学級→登校班で振り返りをした（小学校）

| 学校名 | 10.東京都　墨田区立両国中学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 輪湖　みちよ |

| 活動のテーマ | 「網の目」防災・減災大作戦 |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（社会科）、総合的な学習の時間 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　第２学年　２２２人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | １１　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ２０　人　【保護者・地域住民・その他（防災専門家、大学生）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成　30 年　1 月　　日　　～　　平成　30 年　2 月　15 日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　） |

活動報告

1）活動の目的・ねらい

**①「防災・減災」という視点で身近な地域の調査を行い、地域の特色や課題をとらえる**

**②調査でとらえた特色や課題を基に地域の防災・減災策を考える**

**③防災・減災策を実行に移し、地域防災のために中学生ができることを体験する**

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

| 項目 | 流れ | 備考（外部講師など） |
|---|---|---|
| 防災学習 | １　防災巻の作成 | |
| 地域調査 | ２　地域調査準備①　地形図の読み取り、調査テーマ決定 | 横網町会豊島様<br>区防災課宮本様<br>防災教育普及協会宮崎様<br>早稲田大学大塚様<br><br>地域の特色や課題をとらえた上で中学生に実施できる防災・減災策を考える（予算が必要な場合は、５万円以内で計画する） |
| | ３　地域調査準備②　資料収集、調査計画 | |
| | ４　地域調査準備③　調査計画、ルートマップ作成 | |
| | **５　地域調査（1/29 月）聞き取り調査、野外観察、記録<br>①１組②５組③６組④４組　⑤３組⑥２組** | |
| | **６　調査結果整理、考察①　資料整理、まとめ** | |
| | ７　調査結果整理、考察②　まとめ、発表準備 | |
| | ８　調査結果整理、考察③　発表準備 | |
| | ９　調査結果、考察発表（学級内） | |
| 防災学習 | １０　調査結果、考察発表（学年）**2/15 木⑤⑥** | 豊島様・防災課職員・佐藤先生 |

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

**①生徒自身の気付きや思いを引き出し、防災・減災について考える授業構成の工夫を行った**

**②調査に際し、地元町会や区防災課、防災専門家へ協力を依頼した**

**③講師依頼や防災・減災策を実行に移すことが可能になった**

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

○避難訓練（生徒の帰宅経路含む）や校内体制の見直し

○備蓄倉庫や災害時に使用するトイレなど備えの把握

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

○専門家や地域の方の協力野外調査を行い、防災という視点で課題や対策を見つけることができた。

○野外調査で見つけた課題や対策を解決したり、より良くしたりするための対策を個人や班で考え、案にまとめ、発表することができた。

○身近な地域の防災対策を考えたことにより、防災を自分ごととしてとらえ案もより具体的に考えることができた。

○案を考える中で、対策があるだけではなく「対策を伝える」ことが大切だと気付き、どうしたら伝えられるかを考えることができた。

○各班の発表を学級・学年単位で聞くことにより、より深く地域の特色や防災・減災対策について考えることができた。

○講演を通して、「防災とは何か」「防災の大切さ」についての理解が深まった。

○活動全体を通して、自分にできる防災対策を実践しようという意欲と地域のために活動したいという意欲が高まった。

【野外調査の様子１　町会】

【野外調査の様子２　隅田川】

【対策検討の様子　ハザードマップや防災パンフレットを見ながら】

【学級発表の様子】

【学年発表の様子】

【対策案：ポスター】

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

○級友だけでなく、専門家や防災課職員、町会の方々など多様な方との対話から学んでいた

○中学生がこれだけ地域のことを思い、対策を考えることができることに驚いた。（町会、防災課）

○災害を自分ごととしてとらえ、自分や他者の命を守ろうとする意欲を感じた。（専門家）

○外国の方や観光客、高齢者や妊婦など多様な人々のことを考えることができた。（教師）

○各地の防災対策を調べ、自分たちの対策の根拠資料として示すことができていた。（教師）

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

①生徒が野外調査や聞き取りから気付き、考えることができる授業の流れを考えた

②生徒の対策を実行する費用として助成金から５万円を出すことにした

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

①地域が学校に期待することと、学校が地域に対して取り組めることとの相違を感じた

②地域の方に協力いただき、防災教育を行うことの有効性を感じた

| 学校名 | 11.兵庫県　神戸市立須佐野中学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 伊東　俊浩　・　有川　隼人 |

| 活動のテーマ | 地域で育てる防犯意識とネットワークを活用した防災学習 |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 総合・道徳・特別活動 |
| 活動に参加した児童生徒数 | 全学年　３７６人 |
| 活動に携わった教員数 | ３１人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | １５０人【保護者・地域住民・その他（消防署・消防団・防災福祉コミュニティ）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成２９年５月８日　～　平成３０年２月１５日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・阪神淡路大震災を知らない生徒に、地域防災・減災の担い手となるための意識を持たせる。

・海抜２ｍ前後の本校区内において、今後高確率で発生するといわれている南海トラフ地震に向けた減災意識を高める。

・今後起こりうる災害に備えている地域諸団体と学校とのネットワークを作り、広い視野に立った減災の意識を持ち、有事に備える力を身に付けさせる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

【継続活動】

①火災避難訓練（全学年：４月）

②防災施設めぐり（１年生：５月）

・地域の防災関連施設や消防団関連施設、防災福祉コミュニティをめぐる

③消防体験（１年生：６月）

・バケツリレー体験、煙体験、消火器訓練、放水訓練、簡易担架訓練、消防車見学

④市民救命士講習（１年生：11 月）

・消防団による心肺蘇生法講習会

・起震車体験・簡易トイレ設置訓練

⑤水平方向避難訓練

・津波を想定した、班活動での避難訓練

⑥人と防災未来センター見学（１・３年生：１１月）

⑦震災メモリアルディ（全学年：１月）

・阪神淡路大震災への思いを馳せ、鎮魂の式典の実施

・防災バッグづくり、避難所体験、防災クイズ作成

⑧市民救命士講習（１年：１月）

・消防団・近隣病院と連携したケガの手当法講習会

⑨神戸マラソン横断幕製作・沿道応援（生徒会）

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①災害時の生徒の判断力・対応力を身に付けさせるための実践

・災害備蓄品（アルファ米）の食体験、防災バッグを考える授業、段ボールを用いた避難所設営訓練

・防災グッズメーカーの担当者を招いた最新の防災バッグの講習会

・校区内の卸売市場と連携した、魚や災害備蓄品の缶詰を用いた簡易料理製作

②効果的な防災学習に向けた次年度の防災カリキュラム作成

・生徒による防災クイズの作成（校内掲示）

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

既存の防災教育により、災害に対する危機感を生徒に持たせ、地域と連携した実体験を伴う取組を行ってきたが、災害時の生徒の判断力や対応力を高めることが課題であった。今年度は、避難所を想定した訓練や災害備蓄品の食体験を行い、生徒の防災意識をより高めることができた。また、最新の防災バッグを購入し展示することで日常から防災への備えを考えさせることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

防災グッズの講習会では、普段の生活において災害への備えの不十分さに気づき、新たに見直そうとする姿勢が作文などから感じられた。また、次年度の防災カリキュラムに取り入れる防災クイズ作成を通して、さまざまな状況下での対応策について学び、災害への対応力が身についた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

研修会後に職員研修を行い、災害発生時の教員の対応についてその意識を高めることができた。地域・関係団体との連携も継続的に行い、地域に根差した防災教育を推進することができた。また、新たに校区内の商業施設とも協議を重ね、災害時の大規模商業施設と連携した校区内全地域避難訓練の検討に入ることができた。（1月24日に商業施設が校区内の避難場所に制定）

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

消防署や区役所、防災福祉コミュニティなど地域と連携した防災学習を継続的に行い、防災意識を高め、行動力や判断力を身に付けさせることができた。防災カリキュラムの改変に向け、その教材を生徒に考えさせて作成し、また避難所を想定した開設マニュアルづくりのための準備をすることができた。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

阪神・淡路大震災を直接経験していない生徒に関わる教員や地域の大人たちも震災の記憶が薄れつつある。また、防災福祉コミュニティの高齢化も進み現在の取組が困難になってくる可能性もある。今後、さらに地域のコミュニティの中心として、中学校の役割は大きくなると思われる。現状の取組を維持しながら近隣住民の防災・減災意識の高揚に努めたい。

| 学校名 | 12.島根県　益田市立真砂中学校 |
| --- | --- |
| 担当教員名 | 守下　由美子 |

| 活動のテーマ | 守ろう命「自助:自分の命は自分で守る」・支え合おう命「共助:地域貢献～何ができる？」 |
| --- | --- |
| 主な教科領域等 | 教科領域（道徳、学活、総合的な学習の時間、学校行事、PTA 活動等） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （全学年〔2・3年のみ〕　全校生徒５人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | １１　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ７　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成２９年　４月１０日　～　平成３０年　３月３１日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（火災、Ｊアラート） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・「かけがえのない命を大切にする」「自他の人権を尊重する」教育の推進の柱の一つとして、自立・共生・貢献する生徒の育成をめざした、自助・共助・公助について学び合う減災・防災教育を行う。（危機管理意識と能力を高める）

・ＰＴＡ活動や地域の自主防災組織と連携した減災・防災教育の視点を新たに加える。（ふるさと教育、地域貢献）

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

**１学期　地震防災学習＆避難訓練　平成 29 年 6 月 26 日（月）13:25～14:15（参加者 19 人）**

(1)地震防災学習（40 分）→(2)避難訓練（10 分）＊緊急地震速報を使用して、地震訓練を参加者全員で行う。

①パワポ→NHK Eテレ「 学ぼう BOSAI　地球の声を聞こう～地震波が教えてくれること」②「対策が不十分な部屋」の絵を見てどこが不十分か発表する。③NHK Eテレ「学ぼう BOSAI 地球の声を聞こう～地震はなぜ起こるの？」④震度について＆緊急地震速報が届いたら、どう行動する？安全な場所とは？「命を守る３つのない」

**２学期　火災避難訓練＆防災学習　平成 29 年 11 月 24 日（金）14:25～15:30（参加者 23 人）＋Ｊｱﾗｰﾄ避難訓練 9/7**

(1)火災から命を守る防災学習（35 分）～パワポを見ながら、火災からの避難の留意点を学習する。**+災害救護活動 1/22**

(2)　AED の必要性について学ぶ。＊命の記録 MOVIE～ASUKA モデル～AED 減らせ突然死プロジェクト視聴　⇓

(3)　パワポを見ながら、復習と応用学習　(4)火災避難訓練（30 分）→消防団長指導＆消火器実演練習　⇓

**３学期　大震災を忘れない防災学習＆保護者引渡訓練＆保存食試食　H30 年 1 月 30 日(火)14:25～15:40(20 人参加)**

(1)映像で学ぶ「東日本大震災」①直後のニュース映像＋津波映像②いつか来る日のために「証言記録スペシャル　命を守る避難とは」③ NHK「あの日わたしは」２本④「気仙沼市立階上中学校卒業式答辞」⑤「あすという日が」視聴

(2)保存食お湯注入⇒紙食器作り⇒保護者引渡訓練⇒保存食試食⇒減災教育助成金で購入した保存食等＆保管庫紹介

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

**9 月研修会から自校の実践に活かしたこと。【**＊減災教育は、「命の教育」であり、「子供たちの未来への投資」である。

＊震災から 11 日後、避難所となっていた体育館で 2,000 人位いる被災者と一緒に行われた気仙沼市立階上中学校卒業式の胸に迫る答辞が、いかに被災者を勇気づけたことか。あの時の中学生の胸の内。それでも前向きに生きる力。

＊生き残った観測計データの津波最大高さは 9.1mでも、事実は違う。遡上津波の最大は 40.9m。

＊東日本大震災の行方不明者は今でも 2,500 人以上で、阪神･淡路大震災との大きな違い。それが津波被害の残酷さ。

＊判断一つで子どもの命の明暗が決まる。判断が遅れたり、間違うと、災害に巻き込まれる可能性を肝に銘じる。
＊６年経っても避難所や仮設住宅と学校を結ぶ巡回ｽｸｰﾙﾊﾞｽが走っている＝未だに日常が戻っていない現実がある。
＊減災教育で求めるもの(育成する力)～①災害に対する知識･理解。②災害と自分との関係性の認識。③災害に備える力。④災害時の判断力･対応力。⑤復旧･復興への参画･貢献→災害に対応し乗り越えるしなやかな力(ﾚｼﾞﾘｴﾝｽ)の育成。
＊防災･減災教育を通して、様々な能力･態度を育てる。→人間教育となっている。やれるところから一歩一歩！育った子どもが社会を変える。→教員が変わると、子どもが変わる。教員が学校を変え、地域を変える。**】等の考え方。助成金の活用で可能になったこと。**【ほとんど備蓄できていなかったため、この助成金を利用して、生徒･教職員･保護者･地域の方々のための万一に耐えうる保存食や防災用品を購入できたこと＆３学期防災学習での保存食試食。】

４）実践の成果
①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から
＊助成金が一括で口座に振り込まれるので大変使いやすいし、趣旨に合っていれば何を購入しても良い点も有難い。
＊9 月研修会はﾊｰﾄﾞｽｹｼﾞｭｰﾙだったが及川先生の減災教育に対するぶれない理念が貫かれ叩き込まれるので大変良い。
②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。
＊指導者である教員の意識が一層真剣になり、より良い防災教育をめざして教材研究に更に力が入ることにより、生徒にとって質の高い防災学習ができた。「何かあった時には人と人とが協力することの大切さ」を実感していた。
＊地域の自主防災関係者や保護者と一緒に学ぶことにより、生徒と共に家庭や地域を巻き込んだ防災学習となった。
＊新たに立ち上げた親子 PTA 活動(ニコニコ高齢者訪問)を通して、中学生でも地域に貢献できることを実感できた。
③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から
＊避難所となる可能性が高い学校の教職員としての自覚や在り方について考えることができた。
＊保護者引渡カードの作成や引渡訓練を通して、保護者の災害時に対する意識も高まった。
＊今年度より保護者や地域自主防災関係者に防災学習＆避難訓練を公開することにより地域貢献や連携が前進した。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点
＊今年度当初、地域の自主防災団体が設立された機会を捉え、今まで「自助」として行っていた学期に１回の「減災・防災教育及び避難訓練」を、今年度より保護者と地域自主防災関係者に公開した点。
＊H29.4.18 に地域の「自主防災団体」が設立され、災害発生時に高齢や障がいなどによって一人で避難することが難しい人への支援体制を検討している中で、「中学生にも地域貢献として何かできることはないか？」を検討した結果、今年度、長期休業中の親子の宿題として、親子で自分の家の周りの(独居)高齢者宅を訪問し、顔見知りになって一緒に写真を撮り、今まであまりよく知らなかった(独居)高齢者等宅の場所と顔を知ることにより、災害時に共助できる生徒の育成を目指し新たな PTA 活動を立ち上げた。「待ってたよ」と歓迎され双方にとって心の癒しを味わえた。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望
＊保護者や地域関係者に毎学期案内を出したが、平日のため参加率が低い点と参加者が毎回ほぼ同じ方であった点。
＊極小規模校の本校が備蓄できる防災用品には限りがあり、今年度のみの助成金なのだが、地域がそれで安心と思われてはいけない。日頃からの各家庭での備えと共に、行政や地域自主防災団体での計画的備えの必要性も感じた。

**１学期　地震防災学習＆避難訓練　平成 29 年 6 月 26 日（月）13:25～14:15（参加者 19 人）**

**２学期　Ｊｱﾗｰﾄ避難訓練　平成 29 年 9 月 7 日（木）15:40～15:50（各学級にて担任&生徒）**

**３学期　H30.1.22(月)**

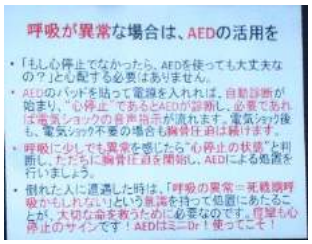
**東日本大震災の**

**災害救護活動に参加して**

（益田赤十字病院看護師）

**２学期　緊急地震速報伝達訓練(全国規模で実施)　H29.11.1(水)10:00 頃（授業中に実施）**

**２学期　火災避難訓練＆防災学習　平成 29 年 11 月 24 日（金）14:25～15:30（参加者 22 人）**



**３学期　大震災を忘れない防災学習＆保護者引渡訓練＆保存食試食　H30 年 1 月 30 日(火)14:25～15:40(20 人参加)**

| 学校名 | 13.北海道　北海道標津高等学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 鈴木　祐二 |

| 活動のテーマ | 高校生ができる減災・地域防災への取り組み |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（　特別活動・自然環境系科目　） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　全　学年　２０　人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | １０　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | １　人　【保護者・地域住民・その他（　役場防災担当　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成２９年　４月　日　～　平成　３０年　３月　２６日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震 ・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（　　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

①避難所運営ゲーム（HUG）を通して、生徒の主体的な活動から高校生として災害時にどのような活動ができるのか考えさせる。また、教職員に対しても同様に災害時の動きを考えさせる（地域と学校の協力）。

②地域の高校生による集い（ハイスクールフェス in 中標津）にて被災地支援活動に参加した生徒によるパネル展示を行う中で被災地の現状を伝え、東日本大震災に対する記憶の風化を食い止め、来場者に対して防災・減災について考えさせる（地域への発信）。さらに、地震津波に対する避難訓練時に全校生徒へ被災地支援活動報告を行い被災地の現状を伝えると共に自らいのちを守る大切さを伝える（生徒からの発信）。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

| ①実践内容：避難所運営ゲーム（HUG） | ②実践内容：パネル展示　被災地支援報告会 |
|---|---|
| 3/27　HUG 生徒会交流（本校にて）<br> <br>10/中旬　HUG に関する打ち合わせ（標津町防災担当）<br>12/2　代表生徒 2 名 HUG 実践研修（釧路東高等学校にて）<br>・被災地支援から広がったボランティア活動についての説明（ミサンガプロジェクトなど）<br>・高校生による HUG の運営方法を学び、実際に体験した。 | 5/3~7　被災地支援ボランティア（福島）（災害支援くしろネットワーク）<br> <br> <br>・福島県南相馬市にて活動 |

12/4　HUG 事前準備（校内図作りなど）

・校内図を模造紙で作成。

・必要物品の準備（マジック・付箋・用紙など）

12/5　HUG 当日（本校　視聴覚教室にて）

・研修の説明（担当教諭　鈴木）

・実践（教職員 1 班、生徒 2 班）

・振り返り（標津町防災担当及び校長）

9/～　・避難訓練に向けて発表資料作り

・ハイスクールフェスに向けた写真パネル選び

・被災地支援活動報告会（避難訓練）の発表内容について事前打ち合わせ（標津町防災担当）

11/9　避難訓練当日　被災支援報告（本校体育館にて）

11/11 ハイスクールフェス当日　パネル展示

（中標津町総合体育館）

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。
（悪天候のため9月の研修会に参加しておりません）

昨年度末から生徒会を中心にHUG（避難所運営ゲーム）を取り入れた生徒会交流会を実施してきた。今年度助成金を受けることによって、移動手段の確保ができ、先進校である管外の高校（釧路）で、減災・防災に興味関心の高い生徒の研修が可能となった。また、本校主催のHUGの取り組みに関しては、助成を受けていることもあり教職員の意識も高く、内容の濃い研修を実践することができた。また、春休みには、釧路管内の生徒会交流を企画し、実践することが可能となった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

被災地支援活動の実践報告を行うことによって、生徒個々の防災に関する意識向上を図ることができた。また、教職員にとっては、HUGを通して避難所となり運営側になったという意識を持って活動に参加することができた。おおむね職員研修としても好評であった。次回は、地域住民・生徒・教職員が共同してHUGを実践することも考えている。また、3月に雪害等に関する学習を町役場防災担当者と計画している。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

自分の意見を相手に伝え、相手のことを尊重する姿勢がHUGの実践で見られた。じっくりと考え最適な答えを出したがる生徒が多い中、HUGを行うことで突発的に発生する事案に対し、いかに早く処理し、その場・その時の最善策を的確に考えることを養うことができた。特に、生徒会役員は、災害時に自主的に活動することの大切さを学びとることができ、生徒会活動の実践力が身についた。

被災地報告会では、生徒から生徒へ、自らの「いのち」を自分で守ることの大切さを伝えることで、災害について、自ら考え行動する力を養うことができた。また、被災者の現状や被災地の今を生徒の言葉で伝えることで、生徒たち自身が震災当時のことだけでなく、復興の現状について考えることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

役場防災担当者の立場からは、学校でHUGを行うことにより、学校での避難所運営の新たな課題や学校独自の考え方について学ぶことができた。教職員としては、減災・防災の取り組みというと避難訓練程度の意識しかなかったが、HUGを体験し、被災地支援活動の実践報告を受けることで、より実践的な減災・防災に向けた意識が高くなり、今後は、保護者を含めたＨＵＧ研修を求める声も上がっている。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

生徒たちの活動を地域に広げ、生徒の視野とコミュニケーション力の向上に繋げた。特に、授業でも交流している町役場防災担当者を交えた取り組みや他校との減災をテーマにした交流会を企画実践できた。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

学校教育計画に予め避難訓練以外の防災・減災に関する取り組みの日程を組み入れること。また、今後は、本校が根室管内の防災減災教育の拠点校とし、他校へのHUG研修などを生徒自ら企画立案し、実践できるようにすること。また、そのための予算を工面すること。

７）その他

添付資料：　写真（HUG×３、生徒会交流×１、避難訓練×１、ハイスクールフェス×１）、記事PDF×３

H29.12.12(火)

北海道通信

## 標津高がHUG研修会開く

# 万一の際の心構え学ぶ

## 生徒と教員30人参加

【根室発】標津高校（中川雅司校長）は五日、同校で避難所運営ゲーム（HUG）北海道版に関する研修会を開いた。災害を想定し同校が避難所となった際のシミュレーションを行い、万一の際の心構えを身に付けた。

生徒二十人と教員十人が参加し、標津町役場住民生活課防災担当の和田直人氏を講師に招いた。研修に先立ち二日には、生徒会副会長の田中智基君（二年）とボランティア部の佐賀葵さん（一年）が、釧路東高校でHUG運営の研修を受けた。

はじめに、鈴木祐二教諭が研修の概要に関して説明したあと、生徒と教員それぞれが班に分かれてHUGを開始した。

各班で役割分担を行いながら、やって来た避難者を教室や体育館に配置。避難所で起こる様々な出来事を想定して対応し、互いに積極的に意見を交わしながら真剣な表情で研修に取り組んだ。

終了後は振り返りを行い、実際に配置した避難者の場所や、その際の対応が適切だったかなどについて意見を交わした。

最後に和田氏が講評し「避難所になったときの高校生の力は素晴らしいものがある」などとコメント。中川校長は自助、共助、公助について話した上で、「まずは自分の生命を第一に、今回の研修の成果を発揮してほしい」と語った。

学校が避難所となった場合の対応などを研鑽した

釧路新聞　平成２９年(2017年)１２月１４日（木曜日）

# 避難所運営 ゲームで学ぶ

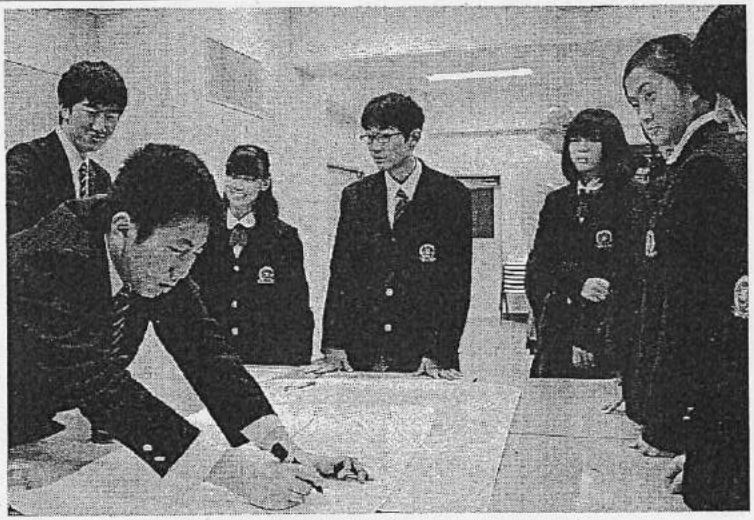
## 標津高で研修会　防災への対応確認

【標津】生徒と教諭の防災意識向上を図ろうと、標津高校（中川雅司校長・生徒数１９０人）は5日、防災教材「北海道版避難所運営ゲーム(HUG)」を使った研修会を開き、避難所運営に必要な知識を学んだ。

防災教育に力を入れる同校では、今年度アクサユネスコ協会の減災教育プログラムに採用されており、今回はその一環として実施。町防災担当の和田直人さんを講師に迎え、生徒20人と同校の教諭10人が参加した。

ゲームは「冬の日曜日の日中に、巨大地震が発生した」という想定で開始。「インフルエンザ患者」や「妊婦」など、さまざまなケースを想定した避難者の対応をはじめ、避難所内で起こる多くの問題解決について話し合った。

終了後、和田さんは「学校が避難所になるケースはとても多い。万が一の時には、皆さんのような若くて元気な力で避難所の運営を助けてほしい」と講評。続いて中川校長が「防災の基本は自助。いざという時は、まず自分の身を守れるように心掛けてほしい」と述べた。



避難所運営の知識を深めた「HUG」

イベント実施に向けて、釧路東高校で事前研修を受けた田中智基さん(16)は「不慣れな部分はあったが、話し合いながら進められた。今回参加してもらった人をはじめとして、町全体に防災の考えを広めていきたい」と力を込めた。

（須貝喜治）

北海道標津高等学校〈ホームページダイジェスト版〉

# 高校ほっとニュース

平成29年度第4号（2月号）
平成30年(2018年)2月1日発行

北海道標津高等学校
TEL 0153-82-2015
FAX 0153-82-2021
URL http://www.n-shibetsu.hokkaido-c.ed.jp
メールアドレス n-shibetsu-z0@hokkaido-c.ed.jp
標津高校 検索
発行責任者　校長 中川雅司

## 2017.11.20(月) e-ネット安心講座

e-ネット安心講座

11月20日(月)6時間目、全校生徒を対象にe-ネットキャラバンのe-ネット安心講座が行われました。講師には、KDDI株式会社の辻様にお越しいただき、生徒たちへさまざまな実例を交えながらネットの危険性や正しい利用方法をわかりやすく講話していただきました。

生徒たちは改めて自分のスマートフォンの使い方やインターネットの利用方法について考えることができました。

## 2017.12.5(火) HUG(ハーグ)研修会

HUG研修会

12月5日(火)放課後、本校視聴覚室を会場にHUG(ハグ)研修会が行われました。

HUG(ハグ)とは、避難所のH、運営のU、ゲームのGを頭文字にした避難所運営ゲームの略称です。本日は、「標津高校が避難所になったら?」という設定で避難所運営ゲームを体験しました。講師として、標津町防災担当の和田さんに来校していただきました。

「実際に自分が避難所を運営する立場になったら?」と改めてその難しさを実感し、さらに、いつでも積極的に対応出来るような心構えを持つことがいかに大切か学ぶことができました。(今回の研修はアクサユネスコの助成により実施しました。)

## 2017.12.15(金) 薬物乱用防止講話

12月15日(金)、釧路少年鑑別所から講師をお招きし、薬物乱用防止講話を実施しました。「薬物の恐ろしさ」や「薬物に関する現状」、そして「生命の尊さ」について、スライドなどを交えてお話いただきました。

今回の講演で感じたことを今後の自分の生活や人生に活かしてくれることを期待しています。

## 2017.12.20(水) 百人一首

百人一首

12月20日(水)、国語科による「百人一首」が実施されました。卒業を控えている生徒達にとって今年が最後の百人一首でした。お気に入りの札が取られてしまうと、悔しがったり、投げやりになったり、泣いてしまったり…。読まれた札をとる、その瞬間ごとに生徒達は札をはさんで、色々な感情を行き交わせていました。

将来、百人一首が、高校生だった時代を感じさせ、人生のどこかに彩りを加えてくれるものとなれていたら嬉しいです。

## 今後の行事予定

### 2月

- 予餞会
- 企業見学会（第1学年）
- 学年末考査（第1・2学年）
- 卒業式予行　同窓会入会式

### 3月

- 卒業式
- 入学者選抜
- 修了式
- 離任式
- 学年末休業

| 学校名 | 14.宮城県　宮城県気仙沼高等学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 長根　彰範 |
| **活動のテーマ** | 震災経験の生き方への活用 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（教科学習、課題研究活動、学校全体、委員会活動等） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　１～３学年　　６７９人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ６５人 |
| 参加した地域住民保護者等 | ６　人　【保護者・地域住民・その他（自衛官２名　消防署員４名） |
| 実践期間 | 平成２９年４月１日　　～　　平成３０年３月３１日 |
| 想定した災害 | 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

気仙沼高校は，昨年度から文部科学省よりＳＧＨ（スーパーグローバルハイスクール）に指定され，「三陸海岸という豊かな自然に抱かれた宮城県“気仙沼”の地から,世界を舞台に活躍するグローバルリーダーを育成する」ことをねらいとして様々な事業に取り組んでいる。国際舞台で活躍するために必要な“コミュニケーション力”“思考力”“多様性・協働性・行動力”の３つの資質を「グローバルリテラシー」と名付け,海を素材とした「協働型学習プログラム」と「東日本大震災復興プログラム」を中心にグローバルリテラシーの育成を目指している。防災に関する学習は，東日本大震災復興プログラムで主に展開している。**本校の防災学習のねらいとしては、◎「命を守る行動ができる人」を育てる。◎発災時行動力に資する「自律的思考力」を涵養する。◎協働による防災チームの育成を目指す。◎将来にわたって集団や社会に主体的に参画する意欲を養う。**

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

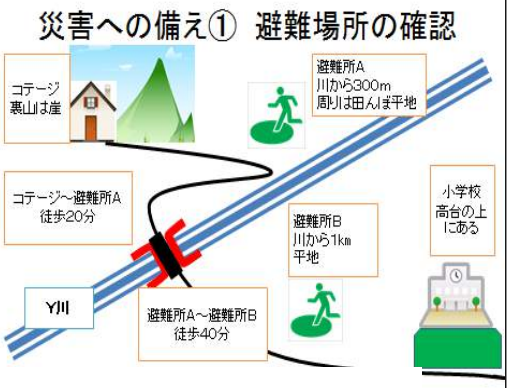
**主な取組１【防災講話】**６月２１日（水），本校と気仙沼西高校の１年生（２８０名）を対象にケーススタディと講話を実施した。第１部では「そのとき，どうする？」と題して，山間のコテージに２泊３日の宿泊研修に出かけたときに大雨に見舞われる場面を想定し，“避難に必要な持ち物の相談”や“天候の変化に伴う避難場所の選択”など天候状況を把握しながらチームで合意形成を図りながら適切な行動することを学んだ。第２部では，ケーススタディの振り返りを交えた「本校の防災学習のねらい」についての講話を実施した。

**想定場面**
**２日目：午前から雨。午後の屋外活動は中止。コテージで待機状態。天気予報は今夜から明日朝にかけて大荒れ。**
**Ｑ：避難時の持ち物を相談しなさい。（３分）**

**午後１時→大雨注意報**
**Ｑ：待機ｏｒ避難？（１分）**
**午後３時→大雨警報に！**
**Ｑ：待機ｏｒ避難？（１分）**
**午後４時→土砂災害警戒情報**
**避難勧告**
**Ｑ：待機ｏｒ避難**
**午後８時→洪水警報も発令**
**Ｑ：待機ｏｒ避難？（１分）**
**午後１１時→大雨特別警報**
**河川氾濫危険情報**
**Ｑ：待機ｏｒ避難？（１分）**
**午前６時：空は晴れ！**
**大雨警報は継続**

**振り返り**
**天候変化の予測と地理的条件を総合的に判断し，チームとして的確な避難行動ができたか？**

**待機？避難？１分で！**



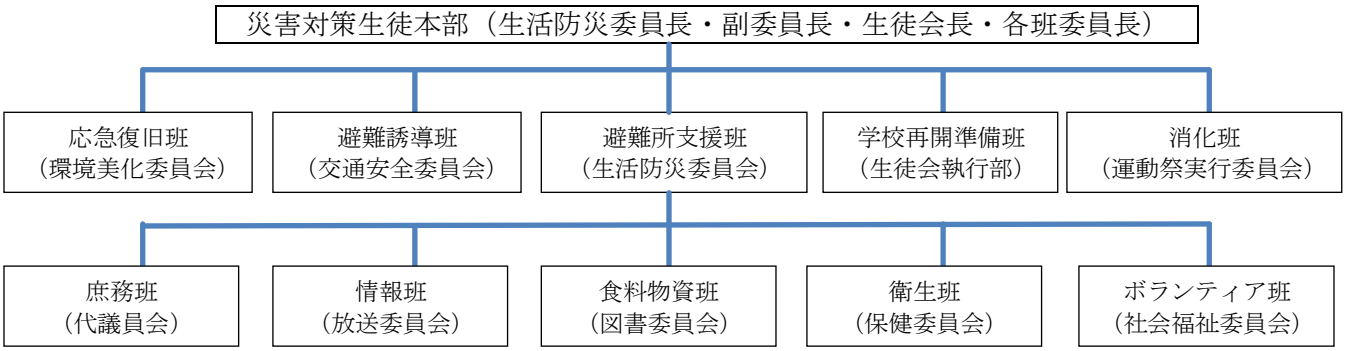
**避難の手がかりは，この地図！**

**俺たち，やばくね？**

**）２回）】**

防災訓練は生徒会の生活防災委員会が中心となり，年２回実施している。生活防災委員は事前研修を受け，ＬＨＲの時間に実施するケーススタディのコーディネーターを務めたり，避難訓練実施計画の作成にも参画している。今年度，１１月に実施した秋季避難訓練では初めて委員会ごとに役割を分担し，組織的対応訓練（避難所設営訓練）を実施した。

**【第二次（避難後）災害対策生徒本部組織図】**




３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

以下の三点を踏まえて実践する。①教育は、災害発生時に自助として、共助として活かされものであるべき。②実際をいかに想定し、防災の構え、備えをしておくか。③生徒にとっては、想定にとらわれない、自助のための判断力、共助のための対応力と協働する態度が重要となる。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

●災害に対する組織的対応の強化　●災害発生時の実際の想定に対する備えの強化

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

●自助のための判断力の向上　●共助のための対応力の向上　●他者と協働する態度

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

●校内防災体制の確立　●教師と生徒の協働による学校としての組織的対応力の強化

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

●自律的思考力の涵養

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

●地域理解（学校周辺、生徒居住地域、通学経路、通学手段）●地域連携（自治体、関係機関、小中）

●家庭との連携

７）その他

●助成金の活用

防災ハンドブックの作成･･･万が一の災害への備えと、災害が起きたときの対処方法

内容 ①学校周辺の防災マップ　②我が家の防災メモ　③災害時に役立つスマートフォンの使い方

④非常持ち出し袋　⑤避難方法

＊④⑤は、生徒の課題研究の成果

| 学校名 | 15.栃木県　栃木県立栃木農業高等学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 嵯峨　俊介 |

| 活動のテーマ | 高校生による市民へ向けた減災・防災の視点を踏まえた環境教育の実施 |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（　農業[農業土木]　） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　３　学年　　８７　人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ６　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ５２　人　【保護者・地域住民・その他（　地域の小・中学生　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成２９年６月１日　～　平成３０年２月１７日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　大雨　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

３年前の関東東北豪雨の際に、校舎に隣接するの複数の沢が地滑りを起こし被災した。行政機関や大学や民間会社と連携し、発生した土砂廃棄物の再利用や今後の防災のあり方を検討し、農業土木科の学習活動の中で代々受け継がれている。

土砂廃棄物の処理によって次の災害を防いだり、土のうという形で再利用することにより、災害箇所の復旧に役立たせるなどといった、今日までの取り組みの成果をまとめ、市民や子ども達に発信する（ESD 活動の実践）ことで、地域一体で防災・減災の視点を持った環境創出に取り組んでいくことを目的とした。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

| 活動計画 | 活動＼月 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 環境調査 | ← | 地域環境調査(１年生) | | → | | | | | |
| | 土砂廃棄物の処理 | ← | 土質調査(2年生) | → | ← | 土砂分別作業(3年生) | → | | | |
| | 林道復旧工事 | | | | | | ← 土砂運搬・土のう敷設(3年生) | → | | |
| | 防災・減災校内研修 | | | | | | | 土砂災害想定避難訓練(全校生徒) | 校内での成果報告(３年) | |
| | ESD活動 | | | | 小中学生向けESD講座(2･３年 | | | | 一般市民向けESD講座(2･３年 | 環境イベントでの発表(2年) |

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①授業内で 3 年前の豪雨災害を振り返させ、自分の身の回りの被災状況だけではなく、栃木市全体の被災状況や地域ごとのデータ、被災者の証言（新聞記事の活用）などを通して、改めて身近な自然災害について学ぶ機会を創った。

②災害後の復旧や二次災害の対策などについて、ものづくりを通してより深化した内容について取り組むことができた（林道の復旧工事など）。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

地域の自然・環境・被災の爪痕と向き合うことによって、「災害はまた必ず起こる」のだという想定をした上で、全校での防災避難訓練（土砂災害が発生という想定で初めて実施）の実施をするなど、学校全体に波及することが出来た。また、本校で防災教育や ESD を実践していることを市民や保護者・子ども達にも知ってもらうことができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

生徒達（関わった方全体）の防災・減災意識が向上した。特に ESD 活動を担った生徒達は、より災害が起こりうる危険箇所の調査（ハザードマップ作り）にも取り組み始めるなど、今までの環境に配慮したものづくりの実践に、「防災・減災」という視点が確実に加わっている。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

ESD 講座の事後アンケートからは、「自然と共存する地域づくりが学べた」「身近な危険性が学べたことと、避難の重要性に気がついた」などの声をいただいた。

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

ESD 活動を 2 度にわたって実践した点。小・中学生対象のものは、理科や道徳の観点を取り入れて、楽しく地域の自然環境や危険性を知ってもらうという内容。市民向けの講座については、より専門的な環境保全技術を紹介し、継続して支援・協働ができるように、生徒活動を PR した。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

本校農業土木科は、平成 31 年入学生より「環境デザイン科」に再編され、より「地域から学び、地域に還元する」技術者や産業人の養成を目指していく。ユネスコスクールへの加入や高校生環境サミットへの参加を目指し、さらに防災・減災の視点を広げて教育活動の中に根ざしていきたい。

7）その他（活動の様子）

①地域環境調査

植生・土壌・水質など多様な観点から地域環境を調査し、科学的な考察による危険箇所の推定や、GIS（地理空間情報）によるマッピングなどを行った。

②土砂廃棄物の再利用

地滑りによって発生した土砂を回収し、重機や手作業によって、有機物や岩石を分別。再利用する土砂は、５００m離れた林道へ運搬した。

重機を使い土のうにする土を分ける生徒たち

# 水害土砂で土のう作り

## 太平山の林道改修へ

### 栃木農高3年生

ホットニュース

【栃木】栃木農業高農業土木科の3年生25人が、2015年9月の水害で発生した土砂で土のうを作り、地元太平山の林道の一部を改修する。被災した校内のため池を手作り土のうで改修した先輩たちの実績を受け継ぎ、地域に貢献しようと計画した。林道は環境省の長距離自然歩道「関東ふれあいの道」の一部で、今月下旬にも本格的な工事に入る。（江戸美佐子）

水害で同校には周辺の山から学校敷地内に流れ込んだ土砂が残る。同科は授業施工も取り上げており、実習などで土砂をエコ資材として活用しようと検討。昨年度の3年生は、強度があるインフラ整備で利用されている「新型土のう」を開発者の指導を受けて作り、校内のため池の漏水対策工事を実施した。

林道整備に取り組む栃木農業高農業土木科の3年生ら

本年度は土のう作りの技術で地域に貢献しようと検討。5月に全校ハイキングを実施した際、ルートになった太平山の林道が陥没したり、階段が崩れたりして歩きにくい箇所があったことから改修を決めた。

改修が必要な箇所は延べ30～50メートルだが、今回は試験施工を兼ねて幅約2メートル、長さ約5メートルのくぼ地を現場や同校の土砂を使って整地する。既に林道のごみや木材を取り除いたり、土のうにする土砂に交じるコンクリート片を取り除くなどの下準備を実施。土のう作り体験を取り入れた市民向けの防災講座も予定している。

プロジェクトリーダーの比留間裕希さん（18）は「先輩から受け継いだ土のう作りで、しっかり林道を整備したい。技術は後輩にも引き継ぎたい」と意気込む。指導に当たる蛯蛾俊介教諭（36）は「人の役に立つことが土木の一番大事なこと。林道整備の経験を生徒一人一人が将来につなげてほしい」と話した。

③ESD 活動

右：ゴマと塩で地層の実験

中右：地域資源（廃材）で
　　ものづくり体験

中左：被災箇所の見学

下右：被災箇所の見学

下左：土砂廃棄物の再利用体験

一昨年の水害で被災した学校敷地内を視察する参加者ら

# 生徒の防災活動を紹介

### 栃木農高ワークショップ

## 土のう作りも体験

【栃木】栃木農業高主催の「防災と環境に関するワークショップ」が20日、同校で開かれ、参加した市民ら20人が災害への備えや復旧について理解を深めた。

同校は昨年から、水害で発生した土砂で土のうを作り、太平山の林道の一部を改修している。今回は市民にも災害について知ってもらおうと企画した。

ワークショップは同校土木科の生徒が講師を務めた。冒頭、実験を交えながら同校周辺の自然や土壌に関する講義を実施。その後、水害で被災した学校敷地内を視察した。

参加者は同校が取り組む林道の改修活動も体験。生徒が集めた土砂を、強度がありインフラ整備で利用されるという新型土のう「D－BOX」に詰め、林道の補強を行った。

参加した箒森町、大森理平さん（79）は「今は雨が林道に入って大変だと知った。とても勉強になった」。同校土木科3年菅野聖さん（17）は「自分たちの活動をもっと知ってもらいたかった。今後も市民の方との交流を深めていきたい」と話した。（斉藤孝人）

| 学校名 | 16.愛知県　愛知県立海翔高等学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 森岡　剛洋 |

| 活動のテーマ | 地域と共に学ぶ減災　～広げよう！学びの輪～ |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 学校設定科目「環境防災基礎」「地域と防災」 |
| 活動に参加した児童生徒数 | １学年１７名、２学年１３名 |
| 活動に携わった教員数 | １０人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 延べ２００人　【保護者５０・地域住民５０・近隣の小中学生１００】 |
| 実践期間 | 平成２９年　５月２５日　～　平成３０年　２月２２日 |
| 想定した災害 | 地震 ・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他 |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

①　本校をとりまく地理的な特性、濃尾平野下流の海抜０ｍ地帯で想定される災害について地域との連携を図りながら理解を深める。

②　生徒、地域住民、学校などそれぞれの立場からの防災を学習する。

③　地域の防災リーダーの芽を育む。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

①　地域のフィールドワーク　　市内の災害にまつわる碑や史跡・輪中・木曽川下流域の治水施設等を訪れ、地理的な特性から想定される災害について学習する。

②　地域の防災訓練等への参加・協力　ＶＣ（防災ボランティアコーディネーター）について学習し、地域の総合防災訓練等で共助支援技術を向上させる。

③　地域住民参加型の聴講授業の実施　本校で実施する減災（防災）授業に保護者や地域住民を招き、共に減災（防災）に関する理解を深める。

④　地域の近隣施設・小学校への出前授業　聴講授業などで学習したことを、近隣小学校などへ出前授業を行い減災（防災）についての学びの輪を広げる。

| 月 | 日 | 内容 | 学年 | 学ぶ | 体験する | 伝える |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 27 | 西部小避難誘導リハーサル「心の減災教育」 | 2年 | | ○ | ○ |
| 5 | 11 | 海部地方総合防災訓練　事前研修 | 2年 | ○ | | |
| 5 | 25 | 西部公園の伊勢湾台風史跡を見学 | 1年 | ○ | ○ | |
| 6 | 1 | 避難訓練のプランを考えるグループワーク | 1年 | ○ | | ○ |
| 6 | 8 | 2 年生による 1 年生への避難所体験レクチャー | 合同 | ○ | | ○ |
| 6 | 15 | 弥富市出前講座「災害に強いまちづくり」 | 合同 | ○ | | |
| 7 | 6 | 避難救助袋を利用した避難　南部消防署レクチャー | 合同 | ○ | ○ | |
| 7 | 13 | レスキューストックヤード講和＆座談会 | 合同 | ○ | | |
| 9 | 21 | 第 1 回聴講授業「伊勢湾台風災害跡地巡検」 | 2年 | | ○ | |
| 10 | 5 | フィールドワーク地域の危険箇所探索 | 合同 | | ○ | |
| 10 | 19 | 第 2 回聴講授業「防災かるた」 | 合同 | ○ | ○ | |
| 10 | 26 | 土木学会出前講座「液状化しそうな地盤とは」 | 合同 | ○ | ○ | |
| 11 | 9 | 第 3 回聴講授業「福祉実践教室　非常時に役立つ手話」 | 合同 | ○ | ○ | |
| 11 | 30 | ハイゼックスでごはんを炊く＆AED講習会 | PTA | | ○ | |
| 12 | 14 | 第 4 回聴講授業「認知症サポーター養成講座」 | 合同 | ○ | ○ | |
| 1 | 11 | アイアリーンブループロジェクト（フランス菊植栽） | 2年 | | ○ | |
| 1 | 25 | 十四山西部小学校出前授業「防災かるた＆防災クイズ」 | 1年 | | | ○ |
| 2 | 8 | 第 5 回聴講授業「土木学会出前講座　橋のふしぎ」 | 合同 | ○ | | |
| 2 | 22 | 十四山東部小学校出前授業「防災かるた＆防災クイズ」 | 1年 | | | ○ |
| 2 | 22 | 弥富市栄南小学校出前授業「防災かるた」 | 2年 | | | ○ |

課外

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 4 | 海部地方総合防災訓練 | 2年 | | ○ | |
| 8 | 9 | 校外学習（人間環境大学） | 2年 | ○ | ○ | |
| 8 | 23 | 十四山西部児童クラブ防災訓練 | 2年 | | ○ | ○ |
| 8 | 24 | 校外学習（名古屋市港防災センター） | 1年 | ○ | ○ | |
| 10 | 29 | 十四山文化のつどい　授業実践報告出展 | 合同 | | | ○ |
| 2 | 24 | 防災ボランティアコーディネーター体験講座（本校） | 合同 | ○ | ○ | |

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

① 以前から取り組んできた地域との連携について、その意識と方向性が明確になった。

② 「学ぶ・体験する・伝える」の活動領域のバランスをとり、３年間継続できる減災教育に取り組んだ。

③ 助成金によってヴィジュアル化デジタル化が可能となり、より効果的に視覚的に学び体験したことを「伝える」ことができるようになった。また次年度からは生徒自らの学びをポートフォリオにまとめてそれを共有できるようにしていく。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

弥富市役所、地域住民、小学校、消防署、ＮＰＯなどの団体とネットワークを築くことができた。単発で終わるのではなく、次年度以降もよい関係を継続してよりよい減災教育に取り組んでいける手応えを感じている。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

入学当初は、おとなしく静かに座っているだけであったが、３学期には主体的に学ぶ姿勢が目立ちはじめた。また、協力し合うために話をすること、自ら手を挙げる積極性などは普段には見られない態度であった。答えがひとつではない問いを考えること、学んだことを壁新聞や出前授業でアウトプットすること、学校の先生以外の専門家から直接学ぶ機会が多いことなどから、他教科では得られない知識や体験は本当に大切なことだと感じたことが大きいと推察する。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

担当教員の視点から、年間５回の聴講授業で各分野の専門家から専門的な知識をわかりやすく生徒と共に学べた。防災・減災への純粋な興味と関心を持つことができた。

保護者の視点から、生徒と共に学ぶ機会はとても貴重であること、保護者同士で学び合える機会も楽しい時間であること。また、聴講授業などをきっかけにして学校行事に積極的に関わっていくことができた。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

各会の専門家を招いて体験・実験を組み合わせた聴講授業をしてもらった。保護者と地域住民に約１ヶ月前から告知して参加を呼びかけた。毎回約１０名程度の参加があり、生徒と一緒に熱心に授業を受けてもらった。

近隣の小学校へ出向いて出前授業を行った。学習したことを高校生が小学生に教える自律的活動として「防災かるた」「防災クイズ」等を行った。

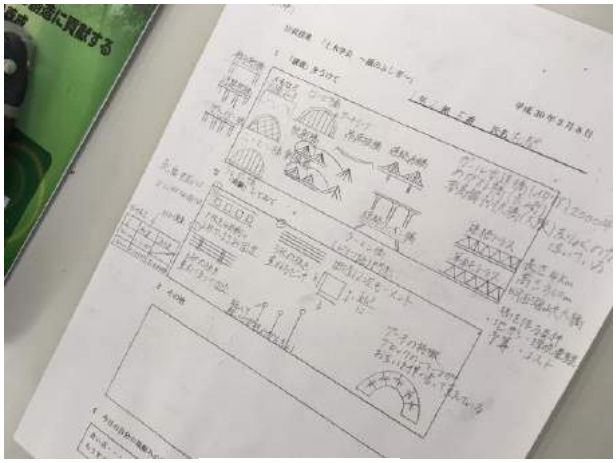
６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

①学びの蓄積と記録、後輩たちへカタチとして残していくこと。

②担当教員以外との関わりと広がりが乏しい。

③上の①②の課題をふまえて、学びの成果をデジタル化・アーカイブ化して校内外に発表する機会をつくっていく。

サバ飯体験



ワークシート

専門家による聴講授業

地域住民との聴講授業

避難誘導

| 学校名 | 17.京都府　京都市立紫野高等学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 和田野　紘平 |

| 活動のテーマ | 「避難経路マップで育む‘主体的・協働的・創造的’な地域との繋がり」<br>～基盤となる当事者意識を涵養する～ |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（　　総合的な学習の時間　　） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　　2　　学年　　40　　人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | 5　　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 20　　人　【保護者・地域住民・その他（教育委員会・市役所）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成　29 年　7 月　4 日　～　平成　29 年　8 月　29 日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　） |

活動報告

**1）活動の目的・ねらい**

①「当事者意識」を持たせることで、防災に対する想像力を養い、普段の生活から「災害により起こりうる被害」を最小限に抑えるために、物心両面の備えをすることができる。

②災害に遭遇した際に、「自分にできることは何か、何が求められているのか」を冷静に判断し、災害現場で求められる「自らを助け」「他者を助ける」ための適切な行動をとることができる。

**2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）**

7 月 4 日（計 2 時間）

1 限目は「防災クロスロード」を実施し、災害時に直面する様々なジレンマの疑似体験をした。それにより、災害対応を自らの問題として考え、様々な意見や物事の捉え方を共有した。

2 限目は「ライフライン復旧までの 1 週間を生き延びるために何が必要か～私たちの防災リュック～」についてグループワークを行った。それにより、自治体が提示する「災害時に必要なもの」を確認するのではなく、生徒自身が自らの生活をベースに「本当に必要なものは何か」を議論することで、「何がなぜどのような場面で必要なのか」を考えた。

7 月 11 日・7 月 18 日（計 3 時間）

「紫野高校の避難経路」の作成のため、フィールドワークを実施した。単に歩くのではなく、1 限・2 限の授業で培った「実際の災害を想像すること・高校が地域の避難場所であること」を意識し、子供や高齢者の目線も取り入れた上での危険個所、避難場所、避難ルートなどの確認をし、気づきの積極的な交流を行った。

7 月 18 日（計 1 時間）

「フィールドワーク」で得た情報の集約と、意見交流を行い、大きなマップポスターに写真などの情報を落とし込み、避難経路の作成を行った。また運用ルール(例：災害時要援護者の避難誘導など)や、活用法（例：公民館の掲示板に貼るなど）を議論し、「地域に活きる」マップの在り方を考えた。

8 月 29 日（計 2 時間）

「防災・減災・避難生活に必要な物品」を生徒達が実際に手に取り、使い方を学び、「避難訓練」だけでなく「避難生活のシュミレーション」を実施した。実際に「避難や避難生活をしなければならない事態」が生じたとき、率先して判断・行動するために何が必要かを考え、自助だけなく共助の面で、地域の方々への貢献の方法を学んだ。授業は地域の方・保護者・教育委員会・市役所の方々と共に実施した。

10 月 11 日（計 1 時間）

生徒達が作成した避難経路案をもとに、避難経路を作成し直し、職員会議にて変更点と理由を説明した上で、全校生徒で避難訓練を実施した。

**３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。**

助成金を受けたことで、防災用物品（テント・浄水器・救急セット・トイレ・防災リュック・防災寝袋）を揃えることができた。これにより、これまで画像や動画を見せるだけだった授業から、生徒達が実際に手に取り、使い方を学び、共有するという、実践的な授業が可能になった。

**４）実践の成果**

**①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から**

防災用品が揃ったことで「災害発生から避難生活まで」の詳細なシュミレーションを初めて実施することができた。どこで被災するかわからないことを考えると、一度生徒がこれを体験できることは、被災現場で自助だけでなく共助の面でも重要であると考える。また、この授業をきっかけに、避難経路の見直しも行われ、学校全体としても防災意識が高まった。

**②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。**

防災を積極的に自分事として捉える当事者意識の芽生えがみられた。防災用品の使い方を学び、他の人に説明できるようになるだけでなく、マニュアルに無い効果的な使い方を提案できるようになった。その意味で、持っている知識や技術をつなぎ合わせて、場に合わせた答えを創り出していく応用力が身についたといえる。

**③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から**

授業には保護者・地域・教育委員会・市役所の方々も生徒と一緒に参加していただいた。参加者からは「生徒の逞しさが伝わってきた。生徒ならではの防災の視点を共有することができ学ぶことが多かった」という意見があった。生徒からも「大人の持っている知識や経験にハッとさせられた。年齢の上下関係なく議論をすることができて良かった」という感想が多くあり、両者にとって防災を学ぶ上で良い機会となった。

**５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点**

防災物品の使い方を教師が提示することはなく、生徒自身が調べ、周りの人に説明をし、さらに新たな使い方を考案させたこと。災害時から避難生活まで、一連の流れをシュミレーションしたこと。管理職も授業に参加したことで、これまでの避難訓練の経路の課題が学校レベルで共有でき、改訂につながったこと。

**６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望**

防災を自分事として捉える仕掛けを授業にいくつも組み込むことの重要性を改めて認識した。授業が 40 名ほどだったため、防災意識を広めるという観点で課題を感じる。対策としては、この授業を学校行事に組み込むなど、生徒全体が同じ認識を持てるような仕掛けを作っていくことが望まれる。

活動写真

平成 28 年 7 月 3 日　防災授業１　メモ

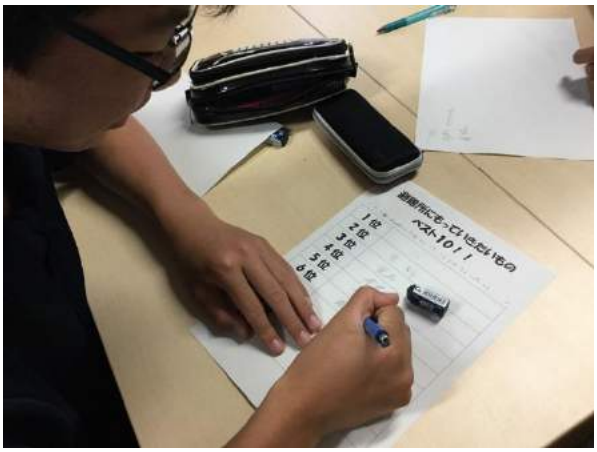
１限目は「防災クロスロード」を実施し、生徒たちに、「災害時に直面する様々なジレンマの疑似体験」をさせた。これにより、災害対応を自らの問題として考えることや、様々な意見や物事の捉え方を共有できるよう指導した。

写真①：授業の目的を確認

写真②：ジレンマを提示

写真③：YES/NO の意思カードを提示。理由を発表。

2 限目は「ライフライン復旧までの 1 週間を生き延びるために何が必要か～私たちの防災リュック～」についてグループワークを行った。それにより、自治体が提示する「災害時に必要なもの」を確認するのではなく、生徒自身が自らの生活をベースに「本当に必要なものは何か」を議論することで、「何がなぜどのような場面で必要なのか」を考えた。




写真④：避難所に持っていきたいベスト 10 記入。水・食糧・携帯電話が多かった。

写真⑤：「モノ」の備えと「心」の備えの重要性

平成 28 年 7 月１１日　防災授業２　メモ

「紫野高校付近の避難経路」の作成のため、フィールドワークを実施した。単に歩くのではなく、前回の授業で培った「実際の災害を想像すること・高校が地域の避難場所であること」を意識し、子供や高齢者の目線も取り入れた上での危険個所、避難場所、避難ルートなどの確認をし、気づきの積極的な交流を行った。

写真①：駐輪場部分の通路と石垣１

写真②：石垣２

写真③：体育館横の通路に置かれた道具

写真④：錆びた電気配線箱

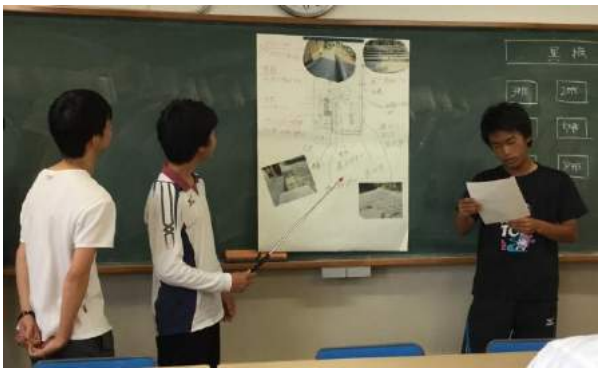
写真⑤：調べてきたことをマップに書き込む１

写真⑥：調べてきたことをマップに書き込む２

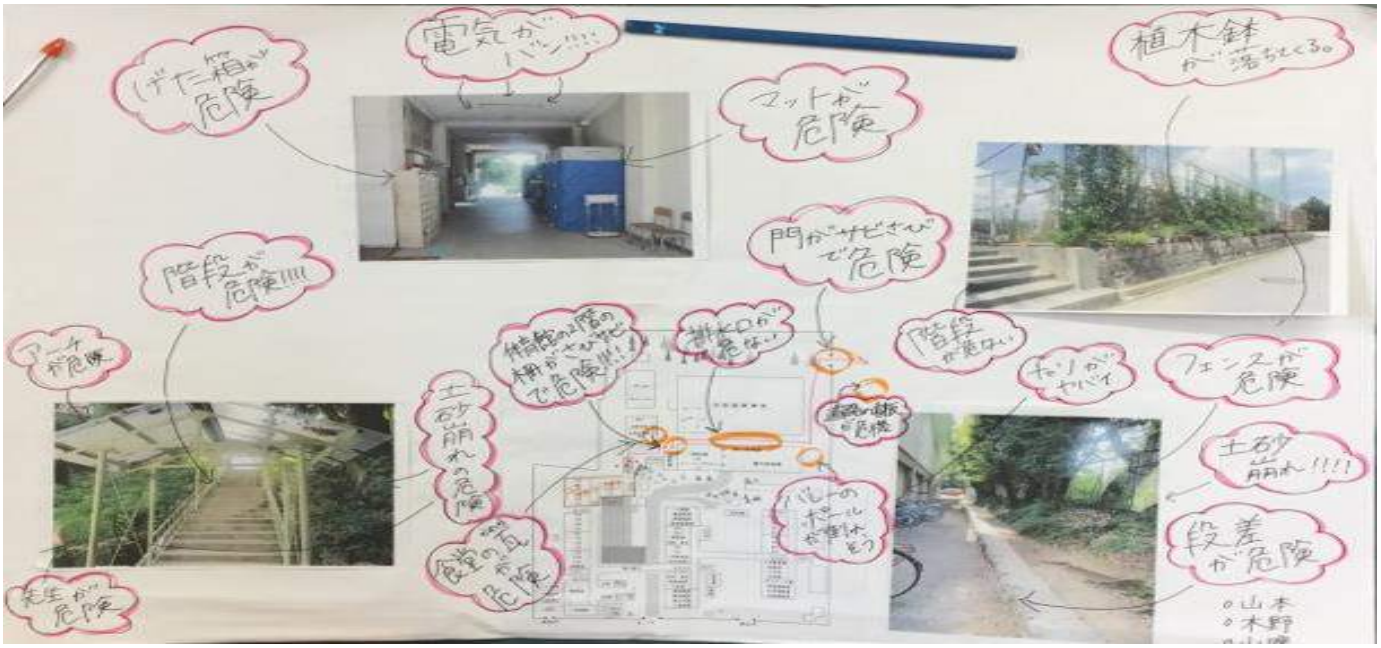
平成 28 年 7 月１８日　防災授業３　メモ

「フィールドワーク」で得た情報の集約と、意見交流を行い、大きなマップポスターに写真などの情報を落とし込み、避難経路の作成を行う。また運用ルール(例：災害時要援護者の避難誘導など)や、活用法（例：公民館の掲示板に貼るなど）を議論し、「地域に活きる」マップの在り方を考える。

写真①：各グループのマップ発表１



写真②：各グループのマップ発表２




写真③：マップ例①。校内の危険個所を 20 個記入する。

写真④：マップ例②校外の危険個所を多く記入していた班。

平成 28 年８月２９日　防災授業４　メモ

防災用品の使い方を知り、実際に避難しなければならない状況が生じた際に、生徒一人一人が避難所のリーダーとして行動できるようになることを目的に、グループワークを実施した。PTA・地域の方・市役所の方にも参加していただいた。

↑写真①：救急セットの中身の確認。

↑写真②：包帯の巻き方を生徒が実演。

↑写真③：浄水ボトルで泥水を浄化。
実際に飲んで安全性を確認してくれました。

↑写真④：簡易トイレの作り方。凝固剤の使い方を実演。

↑写真⑤トイレやシャワー用小型テントの設営。

↑写真⑥：防災用寝袋。先生方も参加してくれました。

↑写真⑦：防災用テントの設営と撤収の方法を実演。

↑写真⑧：乾パンや保存水を実際に味見しました。

| 学校名 | 18.兵庫県　兵庫県立淡路高等学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 齋藤　宏紀 |

| 活動のテーマ | 「防災と心のケア」～被災者に寄り添う～ |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（　　防災　地歴・公民　国語等　　） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　　２学年　　１３人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ３人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | １５０人　【保護者・地域住民・その他（　　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成２９年４月１日～平成２９年１２月２３日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（避難所での対応） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

兵庫県南部地震による阪神・淡路大震災により生じてきた諸問題を考え、将来の震災に対して被災者（特に小さい子どもたち）に寄り添える人間を育成する。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

(1)　日　時　　平成 29 年 10 月 6 日（金）8:50～10:40
(2)　場　所　　県立淡路高等学校　図書室
(3)　内　容
（ア）第１部　8:50～9:40
講義　ひょうごボランタリープラザ所長　高橋守雄 氏
「災害ボランティアセンターと災害ボランティア
～災害時に被災者と支援者をつなぐ役割～」

（イ）第２部　9:50～10:40
講義・実技　一般社団法人おいしい防災塾　代表理事　西谷真弓 氏
「講話と防災お菓子ポシェット作り」
(4)　指南役　　ひょうごボランタリープラザ所長　高橋守雄 氏
一般社団法人おいしい防災塾　代表理事　西谷真弓 氏
(5)　参加者　　県立淡路高等学校　2 年生「防災と心のケア」選択者 13 名
(6)　県立淡路高等学校の今後の取組み予定
・北淡震災記念公園において「阪神・淡路大震災語り部活動」の実施
・地域の子どもたちへの防災ポシェットのプレゼント作り
・県立こどもの館　イベント（Xmas イブイブ交流会 12/23 等）への参加

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9 月の研修会を経て、普段から地域とのつながりを持つことの大切さを感じた。そこで、文化祭をはじめ多くのイベントに参加し防災お菓子ポシェットづくりを実践した。助成金によって防災お菓子ポシェットづくりの活動を複数回実施することができ内容も充実した。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

今回、減災（防災）教育に主として関わった生徒が 2 年生の一部であった。活動自体は充実したものであったが、学校全体に影響があったとまではいえないので、今後は総合学習などにも応用し内容を広げていきたい。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

防災お菓子ポシェットづくりを通して、小さいこどもたちの目線に合わせることや優しく丁寧に笑顔で話しかけるなど、子どもたち寄り添う気持ちが芽生えた。どうしたら子どもたちが安心してくれるか考えようとする態度が身についた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

教師の視点から、生徒たちが小さい子どもたちができることを考え、子どもたちに合わせながら必死に取り組んでいる様子が印象的であった。自己有用感の高まりを感じた。

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

学校設定科目「防災と心のケア」の授業の一環として実践したが、本校の特徴で「防災と心のケア」選択者は「社会研究部」という部活動に入ることになっているため、放課後や週休日の活動がしやすく、交通費などの補助も得られやすかった。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

小さい子どもたちにとって、高校生は頼れるお兄さんお姉さんというような存在で、大人が入る余地はないと感じた。今回は一部の生徒に限られた活動であったため、今後は学校全体の活動としていきたい。

7）その他（※特にあれば記述）

本校の防災教育について

阪神・淡路大震災の被害を受けた学校として平成 11 年度から防災科目を開講し、防災・減災について学ぶ「防災と心のケア」を学校設定科目として行っている。阪神・淡路大震災や東日本大震災などを中心とした自然災害について、本校の教員による授業をはじめ、さまざまな外部団体の協力により、講話・体験学習を行い、地域に貢献するため防災マップの作成や地域での防災イベントなどに取り組んでいる。阪神・淡路大震災の震源地から最も近い高校として、その経験と教訓を生かし、地域社会と連携して防災教育を継続・発展させていくことが目標である。

防災マスコットキャラクター『**チンげんさいクン**』

**チン・・・鎮める（しずめる）**

**げんさい・・・（災害を減らす）減災**

をかけて「チンげんさいクン」といいます。

いざというときに地域の力となれるよう、

困ったときは手を差し伸べられる人になれるようそんな思いが込められています。

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。

添付資料１

講演会の様子（１０／６）

そごう神戸店での実践（１１／２５）

添付資料２

文化祭での実践（１１／２５）

イブイブ交流会での実践（１２／２３）

| 学校名 | 19.広島県　広島県立瀬戸田高等学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 藤田　玲生 |

| 活動のテーマ | 過疎地域における災害時の高齢者の避難の在り方を考える |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（特別活動（生徒会活動，ホームルーム活動），総合的な学習の時間，部活動） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （全学年　58 人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | 14　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 720　人　【保護者・地域住民・その他（介護施設職員，他校高校生，小中学生）<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成　29　年　7　月　1　日　～　平成　30　年　3　月　31　日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　） |

活動報告

1）活動の目的・ねらい

学校所在地の生口島は，南海トラフ巨大地震の被害が想定されると同時に住民の 42%が高齢者であるため，全住民の安全な避難が課題とされる地域である。本校ではこれまで，独自の部活動である「しまおこし事業部」を中心に，地域における介護の問題に取り組んできたが，今年度，自らの減災（防災）意識と行動力を高めるとともに，地域における減災（防災）に貢献することを目的に，災害時における地域住民の避難に関する課題の解決に資する活動を中心とする「瀬戸田高校減災プロジェクト」を実施してきた。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

7 月　東日本大震災被災地視察希望者応募，視察先連携・視察計画
8 月　自然災害に対する事前学習，東日本大震災被災地視察（仙台市，石巻市，女川町　生徒 2 名）
9 月　「逃げ地図」に関する学習（日本建築学会参加），東日本大震災被災地視察校内報告会
10 月　視察報告・逃げ地図制作ワークショップ①（地域住民・医療介護施設関係者・消防署職員参加）
11 月　津波を想定した校内避難訓練，東日本大震災被災地視察校内報告会，
　　ボランティア関係団体等での生徒交流
12 月　共創力で進む東北プロジェクト参加，ボランティア関係団体等での生徒交流
　　地域の小学校児童・保護者対象に活動報告，尾道市長・広島県教育委員会教育長に活動報告
1 月　視察報告・逃げ地図制作ワークショップ②（瀬戸内海島嶼部高校生合同研修会　広島・愛媛県 5 校）
　　瀬戸田市民会館において，高校生，小中学生，行政，地域住民等に活動報告
3 月　「共創力で進む東北プロジェクト」から生まれた 10 プロジェクト交流会（東京）に招待参加

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
　昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修会で見学した学校の児童生徒の主体的な学習から，減災意識だけでなく，課題発見解決力や表現力，他者と協働する力，社会貢献への意欲などが育成されていることがわかり，本校の減災プロジェクトにおいても，生徒自身が考え，議論し，活動し，事後の自己評価をするということを貫き通すことができた。

プロジェクトにおいては，実際の被災状況や被災された方の体験を踏まえることが欠かせなかったが，助成金の全額を生徒の東日本大震災被災地視察の旅費の一部に充てることで，生徒の視察派遣が可能となった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

本校における防災教育の内容を見直し，改善する糸口となった。従来までの防災教育は，校内での火災を想定した校舎内から校舎外への避難と消火訓練が中心の内容で，しかも教員がすべてを仕切るものであった。今年度は，「減災プロジェクト」により，地震，津波，土砂災害などを内容に盛り込むことができた。また，生徒の発表の場を設定したことで，減災（防災）を自らの課題としてとらえるきっかけを作ることができた。ただし，本校での減災（防災）教育をどのように進めていくかとの職員間の共通認識を持つには至っていない。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

計画当初，生徒及び地域に期待する活動の成果として，(1) 減災（防災）意識と行動力の向上（生徒・地域），(2) 減災（防災）ツールの素材の蓄積（生徒・地域），(3) 思考力・判断力・表現力の向上（生徒），(4) 地域内及び医療介護施設間の交流の活発化（地域）をあげていた。(1) (3) について，「減災プロジェクト」に取り組んだ生徒は，地域における危険個所や避難の方法を主体的に考え，地域住民等とのワークショップなどを経験する中で，減災（防災）意識を高めるとともに，企画力，対話力，行動力，貢献意欲などを身に付けてきた。さらに，「共創力で進む東北プロジェクト」など他団体が主催する催しにおいても，主体的な参加態度を示し，参加者から大きな評価と期待を得て，東京で開催される交流会に招待された。(2) について，「逃げ地図」づくりに取り組む中で，危険個所・避難場所の確認，避難経路の検討などを具体的に行う手法を理解し，それを伝える力を身に付けた。本校生徒全体については，減災を他人事ととらえないで取り組む「減災プロジェクト」を知ることを通して自らも減災の担い手であることを自覚するきっかけを得ることとなっている。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

②の (1) (2) (4) について，地域住民及び医療介護施設関係者を対象とした「逃げ地図」づくりワークショップを通して，減災（防災）の観点から地域の状況を知っておくことの大切さ，住民同士，住民と地域の施設とのコミュニケーションの重要性などを認識していただくきっかけとなった。また，「逃げ地図」の手法を知っていただく機会となった。島嶼部高校生合同研修会でのワークショップは，地域貢献活動に取り組む他校の生徒に，減災の観点からの地域貢献を提案し，取組のひろがりを作り出すこととなった。

本校職員に，今後の防災（減災）教育の在り方を考える糸口を示すものとなったが，共通認識は今後の課題。

「減災プロジェクト」をはじめとする地域貢献活動が評価され，しまおこし事業部が，青少年のボランティア活動の文部科学大臣賞を受賞した。また，「減災プロジェクト」を含む本校の学習活動が持続可能な地域社会づくりに貢献しているとして，広島県ユネスコＥＳＤ大賞を受賞した。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

持続可能な地域社会づくり，地域貢献ということを土台に据えて継続的に活動してきた点。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

高校生から地域へ発信することが，地域から高く評価され，生徒にとって大きな自信となった。地域への発信とともに，校内での減災（防災）教育を充実させ，全生徒の減災（防災）意識を一層育むことが課題。

７）その他（※特にあれば記述）

## 活動写真

東日本大震災被災地視察（助成金を生徒派遣の旅費に充当）

視察報告会（昼休憩時間にミニ報告会）

視察報告会（防災訓練後，全校生徒対象）

地域公民館で視察報告・「逃げ地図」ワークショップ

地域公民館で「逃げ地図」ワークショップ

小学校で児童・保護者対象に「減災プロジェクト」を説明

瀬戸内海島嶼部高校生合同研修会のフィールドワーク

瀬戸内海島嶼部高校生合同研修会のワークショップ

地域のホールで小中高生，地域関係者等に「減災プロジェクト」と文部科学大臣賞受賞を報告

尾道市長に活動を報告

共創力で進む東北プロジェクト参加

| 学校名 | 20.熊本県　熊本県立東稜高等学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 竹中　京一 |

| 活動のテーマ | 生徒自らが行う防災教育の永続的システム作り |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（国語、数学、英語、地歴公民、理科、体育、家庭、情報、特別活動） |
| 活動に参加した児童生徒数 | 全学年約１０８０人 |
| 活動に携わった教員数 | ８５人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ５５人　【保護者・地域住民・その他（関係機関）】 |
| 実践期間 | 平成２９年４月１日　～　平成３０年３月３１日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（ミサイル発射対応） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

１４年後には、熊本地震後に生まれた震災を知らない生徒が入学してくる。また県内でも被災状況の濃淡が大きく防災意識にも温度差が大きい。さらに「熊本の次はまた熊本」の可能性も高く、防災教育は喫緊の課題である。また本校生は全国に進学していくため「東稜高校は内陸部に有り津波は関係ない」ではなく、総合的な防災リテラシーを身につけさせる必要がある。

一方学校は、震災の為１ヶ月間授業の中断を余儀なくされ、学力保障のための授業時数の確保、生徒の心のケアのための担任の時間確保が最優先されるべき状況にある。また学校には、性教育、キャリア教育、主権者教育など〇〇教育と名のつくものが数多くあり、授業時数確保に苦慮している。以上の実態を踏まえて、活動のテーマを上記のとおり設定し、防災教育をブームや一過性のものにさせないために、日常の教育活動に溶かし込むことを活動の目的とした。新しいことに極力手を広げず、今あるものを防災の視点から見直し、生徒に出来る事は生徒にさせながら、自主性、責任感、行動力の育成と共を図り担任負担を減らし、授業時数削減をしない、どの学校でも、誰が担当者でもできる持続可能なシステムとプログラムの開発をねらいとした。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

実践は、学校防災教育年間計画に従って行った。（別添資料１）教科内容を防災の視点から見直し各教科の授業の中で行うものと特別活動の時間を使って行う防災教育（Ⅰ）～（Ⅳ）（別添資料２）と防災をテーマにした小論文コンクール（別添資料３）、防災グッズアイディアコンテスト（別添資料４）、Ｐ１チャレンジ（別添資料５）など行事として行うものの３分野から構成した。

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修会の学びの中から実践に生かしたことは、次の３点である。階上小学校、中学校の訪問の中で最先端の防災教育を見せていただき、児童・生徒は高い防災リテラシーを身に付けていることを実感した。熊本でも今後小中学校で、高い防災リテラシーを身に付けた生徒が入学してくることが予想される。高校としてそれらをさらに深めるようなプログラムの開発を心掛けた。また研修全体をとおして、人と人との繋がりが人の心と体を救うことを学ばせて頂きハード面とソフト面のバランスを心掛けた。例年、校内での避難訓練が主な実践であったが、本年は訓練に加えて教育の実践も導入した。学校一斉指導を変更し、３

か年計画で原則学年毎のプログラムとした。また助成金の活用で、Face to face の他校交流が可能となり、防災教育の核となる生徒防災委員の育成が出来た。（別添資料６）

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

防災教育・防災管理に関して、昨年度の１事業から本年度２１事業に事業数を大幅に増やしたが、短縮授業１日と３時間のＬＨＲとでほとんどの事業の企画、運営を担当者と生徒防災委員で行うことが出来た。学校評価アンケートの結果の分析（別添資料７）の防災教育に対する満足度の問いでは、生徒は、よくあてはまる５６％、当てはまる４０％で、ネガティブな回答である当てはまらない、全く当てはまらないを合わせても４％であるのに対して、職員は「防災教育に積極的に取り組んだ」では、よく当てはまる２８％、当てはまる５４％であるのに対して、ネガティブな回答が１８％と生徒の４倍強となった。活動量は満足度を高めるための重要なファクターであるから、保護者の回答結果が、生徒と職員の中間の結果であったことと合わせて考えると、本年度の防災教育は、少なくとも、生徒主体の活動が多い実践であったといえる。防災教育と授業時数の確保・生徒主体の活動が両立できて、防災教育の日常化と継続に寄与できるプログラムに近づいたと思われる。しかし地域防災の要である職員の防災意識と防災リテラシーの向上が今後の課題ともいえる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

専門家による講義と実習により基本的な防災リテラシーが獲得された。また地域住民、関係機関、保護者、学校運営協議会委員の協力を得て行った避難訓練・防災訓練の各学年のアンケート結果を分析すると（別添資料８，９、１０）、全学年で「防災について家庭でも話題にしたい」「何らかの備えを考えたい」と大多数が答えており防災教育の成果が家庭にも波及した。２年生では、「防災通信を公民館に貼りたい」などのアイディアが寄せられ、約２５％の生徒が「今回の避難所開設支援訓練で学んだことなどを活かして、地域のボランティアに取り組みたい」と回答している。地域を巻き込んだ避難訓練、防災訓練の Face to face のコミュニケーションが、地域と生徒の距離を縮めた。また知識や技能を身に付けたことがボランティアへのハードルを下げた。今後学校としてボランティアを推進していかなければならない。逆に言えば我々がそのような機会を与えてこなかった。反省点である。学校評価アンケート（別添資料８）のボランティアに対する満足度に関する問いの回答から、「ボランティアを積極的に行っている」という問いに、よくあてはまる、当てはまると回答している生徒が、３１％にとどまっているのに対して、職員は「ボランティアを積極的に推進している」の問いにポジティブな回答が、７４％で２倍強となっており、生徒と職員の意識のずれが大きい事がわかる。これは教職員の認識の甘さに起因している部分も大きいと考えられ、職員の意識改革のための社会性、社交性の養成やボランティアをコーディネート出来る教員の育成が課題として浮上した。すなわちボランティア推進は、生徒の問題でなく指導者側の問題である。この問題点が洗い出せたことも大きな成果であった。労働力提供型でなく課題解決型のボランティアの推進を目指す。

また、小論文コンクールでは、防災意識を検証することで日常生活の意識を検証することも出来た。非日常を考えることで日常生活が改善される、防災教育の他の教育活動への波及効果が確認された。特に３年生では、この傾向が強かった。防災グッズアイディアコンテストでは、日常を防災の視点から考えるきっかけを与えた。この取組から将来商品化出来るものが生まれ、その収入で防災教育の活動資金が得られれば幸いである。防災通信は、家庭の防災意識の高揚に繋がった。P1 チャレンジも、意識向上の有力な手段となり得ることが確認できた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

本年度から熊本県は、全ての県立学校を防災型コミュニティースクールに指定して、学校運営協議会を設置して（別紙資料１１）、新設の防災主任を中心に地域と連携した防災管理に取り組んでいる。東稜高校のある山ノ内地区はベッドタウンである。人口約９７００人、うち高齢者２０００名、うち要介護者４００名、昼間の発災の場合、現役世代のほとんどは町外に働きに出ており、東稜高校約１２００人は貴重なマンパワーである。地域連携の中でこの事実や地域の東稜高校に対する期待が分かったことは成果の一つであった。また逆に東稜高校を地域に知って頂いたことや地域や行政の声を防災マニュアルなど防災管理に生かせたことの意義深く、「防災行政に関する高校生の意見を頂きたい」という声も上がり、取組に双方向性が出てきた。人と人との繋がりが出来たことが最大の成果である。保護者からも期待以上の満足度を得た。（別添資料８）

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

生徒自らが防災教育を行うために、核となる人材育成を行ったことが工夫した点である。具体的には、生徒会の中に、生徒防災委員会を新たに設置して生徒防災委員を中心に様々な活動を行った。クロスロードゲームやＨＵＧ研修は、生徒防災委員が中心となって授業を進めた。また防災通信の発行（別添資料１２）、京都府立東稜高校、宮城県多賀城高校、大阪府立三国丘高校との生徒交流、NPO団体の主催するHABATAKI　東北×熊本　～復興の輪プロジェクト～や兵庫県「人と未来防災センター」での研修をとおして、生徒防災委員が自ら知見を広め、それを生徒や家庭に対して、防災通信や防災教育、文化祭などあらゆる機会を利用して、広めることが出来た。また地域の祭りにも参加し、防災に関するブースを開き得られた知見を地域にも発信した。理数コース、国際コースも特色を活かした取組が出来た。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

人と人との繋がりを作ることが防災教育では大切であるということが実践から得られた教訓である。多くの外部の方々の献身的なご協力に助けられた。感謝の一年であった。

課題については、小中学校で身につけた防災リテラシーを深化させるプログラムの開発である。小論文コンクールでも、防災意識の高まりなど一定の効果が得られたが、日本人がなぜ共助に強いのか、絆や無常観など日本人の心の原点に迫る深い考察が出来る洞察力や思考力の養成がさらに求められる。また段ボールベッド作成実習においてはベッド周りの仕切り壁をどの位の高さにするのが適当であるか、プライバシー保護と避難所の安全管理の観点から考えさせるなど、訓練に教育の要素を取り入れる視点を持って、思考力、判断力、表現力を養成できるように、個々のプログラムの改善が求められる。進学校であるからには、学力向上に寄与できる防災教育プログラムを目指したい。またプログラムによっては、広範囲から生徒が通学してくるという高校ならではの事情から工夫すべき点や限界も見えてきた。活動資金の確保や防災管理と防災教育の担当者を分けて互いの質を高めるなどの課題がある

７）その他

防災教育は命の教育である。だから理想論ではなく現実論で考えなければならない。ましてやきれい事は通用しない。生徒も否応なしに、命や現実と向き合い、また自分と向き合うことになる。このことが生徒を成長させ大人にした。また防災教育は人と人の繋がりを作る。さらに防災教育が進路選択の切っ掛けとなり、進学に結びついた生徒が出たことは、進学校における防災教育実践の成果として小さくない。今後も防災教育の可能性を探っていきたい。

今年度の実践活動は、教員研修で得られた知見がベースとなっている。このような示唆に富む、貴重な学びの機会を与えて頂いたユネスコ協会様やアクサ生命様をはじめ多くの方々に心より感謝申し上げたい。

| 学校名 | 21.宮崎県　宮崎県立門川高等学校 |
| --- | --- |
| 担当教員名 | 下東　義忠　・　齋田　圭一　・　南畑　淳平 |

| | |
| --- | --- |
| 活動のテーマ | 「私を守る　あなたを守る　地域を守る」<br>～減災に取り組む主体的な生徒の育成と地域との連携の構築を目指して～ |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　　特別活動　　） |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　　全　学年　　３９７　人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ５０　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ２５　人　【保護者・地域住民・その他（　行政（門川町役場防災担当）　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成２９年　５月　１日　～　平成３０年　１月３１日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本校が所在する門川町は日向灘に面し、今現在危惧している南海トラフ地震が発生した場合は大きな被害が予想される地域である。そのような地理的条件にある本校は、有事に対する日頃からの意識を高めるとともに門川町の指定避難所としての訓練が必要である。そこで本活動では、次の目的をもって取り組む。

① 減災（防災）のための知識・技能の習得を図り、生徒が主体的に活動できる実践力を高める。

② 生徒、教職員、自治体、地域住民、保護者等と一体となった避難所運営の研修に取組、地域連携を構築する。

③ 減災（防災）教育で取り組んだ内容を生徒の視点でまとめ、それを保護者や門川町内の小中学校、役場等に配布し、減災（防災）教育の啓発を図る。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

平成２９年　５月　１日　避難訓練（地震・津波）
５月１８日　第１回学校安全連絡協議会（学校、ＰＴＡ、門川町役場、地域区長）
６月２８日　職員研修「救急救命講習」
７月　６日　防災教育講話「災害に対する備えの大切さについて」
講師：自衛隊宮崎地方協力本部長
８月２２日　第２回学校安全連絡協議会（学校、ＰＴＡ、門川町役場、地域区長）
９月１４日　「風水害版避難所ＨＵＧ研修」（学校、地域住民、門川町役場）
１１月　１日　みやざきシェイクアウト訓練
１１月　９日　防災教育講話「防災（減災）について学ぶ」
講　師：宮城県気仙沼市立階上小学校　主幹教諭　畠山　友一　先生
参加者：全校生徒、本校職員、ＰＴＡ、門川町役場、地域住民、
門川町内小・中学校防災担当者

平成３０年　１月１１日　避難訓練（地震・火災）
１月２６日　生徒会役員防災研修

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

① 外部講師を招いて講演会を今年度は２回実施することができ、その内の１回は県外から講師を招き、地域と一体となった取組を実践することができた。（助成金の活用）

② 学校安全連絡協議会に参加していただく地域住民（区長）の経費を捻出することができた。（助成金の活用）

③ 学校行事としての防災教育だけではなく、日常の学習（教科）指導の中で取り組める減災（防災）教育を検討し、平成３０年度からの充実を図ることができた。

11月9日　防災教育講話

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・ 校内の避難訓練では、授業時間中の訓練から休み時間に地震が発生した場合に変更し、生徒自らが考え、判断し、行動できる訓練に改善した。生徒たちは普段の訓練との違いから戸惑う場面があったが、自助・共助の観点から充実した内容になった。

・ ＨＵＧ研修を地域の方々と合同で実施することで、有事の際の備えや行動等をお互いに交流を深めながら考えることができた。

9月14日　ＨＵＧ研修

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・ 減災（防災）教育研修を通して、地震・津波・河川氾濫等についての知識が身につき、自ら考え、行動でする意識が高まった。

・ 生徒会役員を中心に、登校経路の危険個所や避難場所等を確認し、その内容を全校生徒に周知するなど減災（防災）に対して自主的・積極的・共同的な態度が身についた。

・ 共助の観点から地域を知る機会になり、地元を愛する心（気持ち）が育てることができた。

1月26日　生徒会役員防災研修

④ 教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・ 教師一人一人が減災（防災）に対する意識を高め、避難訓練等を通して組織的・系統的な行動を確認できた。

・ ＰＴＡと連携して、生徒の備蓄品を確保できた。

・ 本校は門川町の避難所になっており、町の防災担当職員及び地域区長と避難所の初動について協議することができた。

・ 地域や行政と自助・共助・公助を目的にした「学校安全連絡協議会」を定期的に開催し、各役割を確認するとともに地域連携を深めることができた。

8月22日　第２回学校安全連絡協議会

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

・　避難訓練では、職員の担当割り振りを行わず、避難の状況等を確認しながら、機転を利かした自分の動きができるように工夫した。

・　学校行事としての減災（防災）教育だけでなく、教科の学習でも取り組むために、各教科主任と教科の単元で取り組める内容を検討した。次年度からは、教科でも取組む計画である。

・　地域の減災（防災）力を高めるために、本校でのＨＵＧ研修に地域住民にも参加していただき、地域連携の取り組みを実践した。

1月 11 日　第２回避難訓練

・　地域区長、行政、ＰＴＡと共同で実施している「学校安全連絡協議会」に門川町内の小・中学校の防災担当職員にも参加していただき、校種別の取組を共有するとともに今後の協議会の取組について一歩前進することができた。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

・　新設された健康スポーツ系列で、２年次に防災士の資格取得を目指す。この学習の取組を通して、学校及び地域の防災（減災）リーダーの育成に努める。

・　減災（防災）教育を充実させ、成果を上げていくためは、学校、行政、地域住民等との繋がり（連携）が必要であると考える。今後も「学校安全連絡協議会」を定期的に開催し、学校及び地域の減災（防災）力を高めていきたい。

・　現在、「学校安全連絡協議会」の主幹は本校であるが、今後は行政または地域区長に移管し、名称も「学校・地域安全連絡協議会（仮称)」に変更し、持続的な活動になるようにしていきたい。

11 月 9 日　第３回学校安全連絡協議会

# 生徒会新聞

平成29年 9月号(No.3)

## 平成29年度高校生防災リーダー養成研修

**目的**

**各高等学校の生徒と教職員を対象に、防災に関わる講座を開催することにより、地域防災において活躍が期待される高校生に関する実践的な態度の育成と意識の高揚を図る。**

講義内容

| | |
|---|---|
| 講　義Ⅰ【学校での防災教育の重要性】 | 宮崎県教育委員会 |
| 講　義Ⅱ【自然災害発生時の対応及び避難所運営】 | 兵庫県震災・学校支援チーム(EARTH)員 |
| 演　習 【母校の避難所運営シミュレーション】 | 兵庫県震災・学校支援チーム(EARTH)員 |
| まとめ 【学校における取組について】 | 宮崎県教育委員会 |

● 学校での防災教育の重要性　　例 宮城県立石巻西高等学校

東日本大震災時、先生方や生徒が主体的に最大300人の避難住民に対応し、生徒が避難所運営の手伝いを行った。
また、学校は避難所(教室)と遺体安置所(体育館)となり学校の中に生と死が共存していた。
これにより高校生に対するカウンセリングや、防災教育の見直しと避難所運営の担い手として期待が高まっている。

● 宮崎県内での防災取組

- 延岡工業　　校内に地域住民が避難しやすいように、生徒が「避難指示電光掲示板」を作製した
- 日向高校　　地域住民や学校近隣の保育園等との「合同避難訓練」を実施し、有事に備えている
- 延岡商業　　従来のスリッパから、緊急時に避難しやすい「走りやすくて、丈夫なスリッパ」へ変更した。

このように有事の際に備えるべく着実にまた的確に変化していっている。

● 自然災害発生時の対応及び避難所運営 ⟦重要⟧

- 地震・災害が発生した時、まず、自分の命を守る行動をとる!（自分が生きてないと誰も助けることが出来ません） そして次にとる行動は、避難経路の確認！安全が確認でき次第即座に避難して絶対に元の場所には戻らない。（一度家に帰ってしまい津波にのまれて亡くなっている人が多い） 助かるも、また助けるも鬼になれ。
- 避難所運営には学校が避難所指定されていることが多く(避難所指定してない学校も避難所として開設しなければならない)、地域住民は学校に避難してくるので対策をしないといけません。
- 避難所運営委員会の設置並びに本部として、避難所運営委員会、 総務班、 情報班、 物資班、 救護班、 管理班、を統括し公助の手が届くまで助け合っていく(早くても3日)
- 避難所でのボランティア活動、
  東北の避難所では、ボランティアと書いた服を着他人のバッグを触ってトラブルがありました。避難所には人手が足りず、猫の手も借りたい程ですが、ボランティアは社会福祉協議会を通して正式に派遣されてきます。
  しかし、本部が中高生にボランティア要請するのはOK! どこの誰か本部も分からない人はNG!

● 母校の避難所運営シミュレーション

- 自分の通う学校が一体何人の避難者を抱えることができるのか？　(教室棟の二階踊り場に掲示してあります。)
- 人は、立って半畳(1mx2)座って1畳(2mx2)寝て一坪(3mx2)と言われていて長期避難になると苦しいものがあります。

● 学校における取り組みについて

- これから社会において求められていく人材育成をしていく
  - 答えのない問題に挑戦して、解を見出し、新たな価値を見出す存在。
  - 変化の中から自ら課題を設定し他人と協力し合い答えを出すこと。
  - 様々な能力や得意分野、異なるバックグランドを持った多様な人。

### 災害の現実

**自助**…自分で自分を助ける。

**共助**…共に助け合う。(声を掛け合う)

**公助**…公の助け、行政、自衛隊、等
(どんなに急いでも3日～1週間は救助は来ません。 自助,共助,公助,で乗り切る!!)

### まとめ

◆ これからの時代に求められる人材になるために

◆ 「ドライバーズ効果」
脳は、「自分が主体者である」と判断すると活性化する。
「主体的に行動する」

➡ 「気づき」➡ 「問題意識」➡ 「行動」

| 学校名 | 22.千葉県　千葉県立桜が丘特別支援学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 中村　吉伸 |

| 活動のテーマ | 防災学習を通して災害について知り、自分にできることを見つけ行動しよう。 |
|---|---|
| 主な教科領域等 | 教科領域（各教科，自立活動，生活単元学習，総合的な学習の時間等） |
| 活動に参加した児童生徒数 | 小学部６７人／中学部２８人／高等部６２人 |
| 活動に携わった教員数 | およそ　１００人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | およそ　　３０人　【保護者・地域住民・その他（放課後デイサービス等 ）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 平成２９年４月　３日　　～　　平成３０年１月３１日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください。複数可。<br>地震・津波・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・その他（火災） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・防災学習を通して災害を身近に感じ，自分にできることを主体的に取り組む。

・学校，保護者，地域，関係機関等が「つながり」を深め，防災について意見交換する。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

○防災体験（７月）

・起震車体験，消火器体験，煙テント体験

○火災（５月），不審者（８月），地震（１１月，１月）を想定した避難訓練

○引き渡し訓練（９月）

・中学部，高等部の児童生徒が実施

○地域合同の避難所開設訓練（９月）

・HUB ゲーム，千葉市防災倉庫の保管状況の確認，炊き出し訓練

○自治会防災訓練への参加（１１月）

・テントや仮設トイレの設置，消火器訓練，非常食の試食

○学校を核とした県内 1000 か所ミニ集会（１２月）

・シンポジウム「学校の安全，安心を考える」～災害時における学校，地域，関係機関との連携～

○各学級における防災授業の実践（５月～２月）

＜小学部の実践＞

・「簡易防寒具・簡易クッション・紙皿づくり　＊防災学習シート No33」

・「防災○×クイズ　＊防災学習シート No1.38.39」

・「校内防災マップを作ろう　＊防災学習シート No4」

・「応急手当をしよう　＊防災学習シート No10」

＜中学部の実践＞

・「自分の非常食を確認しよう　＊防災学習シート No25」

＜高等部の実践＞

・「校内防災マップ作り　＊防災学習シート No4」

・「我が家の防災について調べよう　＊防災学習シート No8」

・「非常食実食体験　＊防災学習シート No25」

・「校内の防災設備を確認しよう　＊防災学習シート No23」

・市原八幡高校との防災についてのディベート

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・9 月の研修会から防災授業づくりのヒントを得た。配布された「防災学習シート」を活用し，児童生徒の実態に応じた授業づくりに役立てた。特に，児童生徒に身につけさせたい力を ESD の視点から捉え，学習内容を選択することができた。

・災害時におけるマニュアルの新規作成（避難所運営マニュアル）や見直し（スクールバス危機対応マニュアル）を進めている。寄宿舎と連携し，夜間時の災害発生について考え，必要な防災用品について検討している。
・助成金で最新のトランシーバを購入し，引き渡し訓練や避難訓練時の児童生徒の迅速な安否確認や状況把握に役立てた。旧式のトランシーバは性能面で劣り，正確な情報をキャッチすることができなかったため，今回の助成金で購入できたことは大変役立った。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・減災（防災）教育プログラム研修で学んだ被災地の当時の状況やそこから得た教訓等を自校の職員に報告し，本校の防災教育に生かすことができた。また，今年度からユネスコスクールの機関包括型アプローチプロジェクト参加校として防災学習に力を入れたことにより，防災（減災）に対して教職員の意識が高まったと感じている。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・今回の実践で児童生徒が得た力の一つは，体験的な防災学習を通して，災害をより身近な物として捉えることができたことである（経験する力)。本校の児童生徒は，日常的に運動や移動面で支援を必要としているため経験に乏しく，受け身になりやすい傾向にある。また，知的に遅れがある場合は言葉や映像だけの説明では状況の理解が難しい。そのため，災害の怖さやそれによって生じる環境の変化を身体で感じて理解することが必要であり，体験的な学びは非常に重要であった。そして，もう一つは，こうした学習の積み重ねによって，障害があっても自分にできることがあることに気づくことができたことである（経験して学ぶ力)。防災についての知識を得て，自分で考えて避難行動を取ったり，周囲の友達とコミュニケーションを図ったりするなど学習が進むにつれて主体的な態度が見られたことは，児童生徒の自信に繋がったとも言え，成果として大きい。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・避難訓練や引き渡し訓練では，教職員から様々な課題点が挙げられ，より安全に児童生徒の身を守り，避難させるための方策を検討することができた。
・「学校を核とした県内 1000 か所ミニ集会」（千葉県ならではの特色ある取組）では，学校職員，保護者，地域住民が災害時を想定した際の課題についてそれぞれの立場から活発に意見交換を行うことができた。今回は，行政やＮＰＯ，放課後デイサービスの方々も参加して頂き，「地域避難所としての本校の役割」や「地域や関係機関として学校のために協力できること」などについて話し合われ，今後もお互いが連携していくことの重要性を確認することができた。また，ＮＰＯ（千葉災害ボランティア連絡委員会）方からは，意識の問題が最も大切であることや日頃から家庭が安全な場となるようにし，家族との連絡方法等も話し合っておくことが大切であるとお話頂けた。

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

・「防災学習シート」を活用する際，「活動の展開例」を障害をもつ児童生徒の実態に応じてアレンジすることで，学習の理解を深めることができた。
・行方不明者（車椅子の児童生徒）を想定した避難訓練や二次避難場所へ移動する（校舎２階から車椅子を降ろす）際の教職員の支援体制を工夫した。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

・防災学習を継続的，計画的に行うためのカリキュラムの構築が必要であると考える。
・今回の実践で児童生徒が経験して学んだことを日常生活の中に生かしていく必要がある。
・自立活動を主とした教育課程の児童生徒や重度重複の児童生徒の防災教育をどのように捉え，指導していけばよいか検討していく必要がある。
・防災学習を充実させていくために，ＮＰＯと連携しながら授業を進めたり，児童生徒の育てたい力を明確にするためにも「ESD の構成概念と重視する能力や態度」や「防災学習で目指す児童生徒の姿」を学校安全計画に明記していきたい。

○全校で実施した防災体験の様子（消火器体験，煙テント体験，起震車体験）

○地域合同の避難所開設訓練／自治会防災訓練への参加の様子